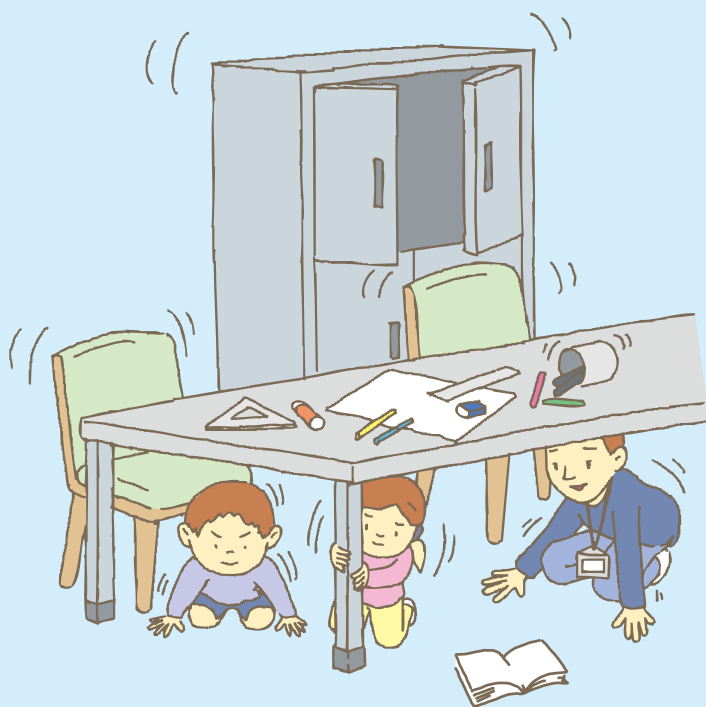
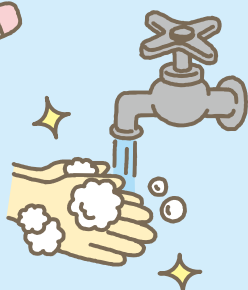
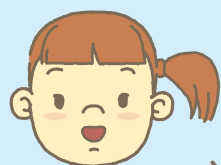


非常時における児童館 とりくみハンドブック



～ 感染症・自然災害時の対応を考える～



目次

はじめに	01
ハンドブックの構成解説	02-04
基本的な考え方	05-06
モデル事業の概要	07
事例紹介	
北海道札幌市	08-11
東京都江戸川区	12-15
愛知県北名古屋市	16-19
新潟県燕市	20-23
沖縄県那覇市	24-27
基本的な考え方	28-30
モデル事業の概要	31
事例紹介	
宮城県仙台市	32-35
兵庫県神戸市	36-39
愛媛県松山市・西予市	40-43
真備児童館(ヒアリング)	44-46
参考資料、事業概要	47-49

【感染症対策編】

【自然災害対応編】

はじめに

児童福祉施設である児童館は、子どもたちの安全・安心な居場所となることが期待されています。それは、自然災害の発生時や感染症の感染拡大の状況下においても変わることがないと考えています。特に今なお続く新型コロナウイルス感染症の感染の広がりは、子どもたちや子育て家庭の生活に大きな影響をもたらしています。そのような中、日々の感染症予防対策の実践により、児童館を利用する子どもたちのいのちと暮らしを守り続けていることにつきましては、大変なご苦労があったかと思われます。この場をお借りして、児童館の運営に関わる職員の皆様に敬意を表します。

さて、自然災害や感染症の感染拡大等により、児童館の通常活動を継続することが難しい状況を「非常時」と定義し、そのような状況においても児童館が安全・安心な居場所となるためには、どのような「とりくみ」が必要かを、全国の児童館の協力を得て、実証研究を行い、今後の児童館活動の参考となる検証ができたと考えております。

本冊子は、これらの調査研究の成果をもとに制作したものです。各自治体、各児童館等において参考にさせていただき、いついかなる時も地域における子どもたちのための居場所としての機能を発揮していくことの一助となれば幸いです。

令和4年3月
厚生労働省子ども家庭局子育て支援課
課長 鈴木健吾

ハンドブックの構成解説

新型コロナウイルス感染症の流行はとどまることなく、各地の児童館運営にも大きな影響を与えています。また、近年、日本各地で自然災害が発生しており、災害の頻発化、激甚化などが指摘されています。

このような、感染症の流行や自然災害の被害によって、児童館では、日常的な活動を継続することができず、開館時間の短縮、活動の縮小、場合によっては休館などの対応を迫られることとなります。

このハンドブックでは、このような日常的な活動の継続が困難な状態を「非常時」と位置づけ、その際の児童館活動について、考え方や具体的に参考となる事例などを紹介します。

厚生労働省では、新型コロナウイルス感染症の流行下における児童館の実態を把握するとともに、児童館の取組をまとめた「新型コロナウイルス感染症対応からの気づき～児童館における実践事例・データ集【令和2年度版】～(※)」を調査研究を通じて発行しました。この調査では、感染症の流行によって、もともとあった児童館の機能は制限され、流行前の状態に回復することの困難が分かりました。つまり、非常時においては、子どもの居場所、子育て支援の機能が十分に提供できない可能性があると言えるわけです。

感染症の流行による健康や経済活動への影響、自然災害の被害(家屋、ライフラインへの影響など)は、目に見えてわかる現象だけではありません。日常的な生活が制約されることにより、大人よりも脆弱性の高い、子どもの心身への影響も大きいと言えます。

どのような状況においても、子どもの心身が守られ、健やかに暮らしていくことを保障するためには、児童館の果たす役割は大きいと言えるのではないのでしょうか。

では、児童館においてどのような活動が求められるのでしょうか。

感染症の流行や自然災害を防ぐには限界がありますが、リスクを正しく理解することが重要です。そして、児童館の置かれている状況から、子どもたちのためにできることを、可能な限り継続的に提供していくことを見出すことがかせません。

このハンドブックでは、記載されている内容をヒントに、各児童館において、子どもたちのために提供できる機能や事業を考えていただくことを目的に作成しています。具体的には、「感染症対策編」と「自然災害対応編」それぞれにおける非常時の児童館活動について、基本的な考え方と、関連する取組事例をまとめました。

(※)https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/houkago/jidoukan_covid.html

●基本的な考え方

まず、感染症対策編、自然災害対応編それぞれにおいて、基本的に理解しておくべき事項や対策・対応に関する基本的な考え方をまとめています。各児童館の置かれている状況と照らし合わせて確認してもらいたい情報です。

●事例

令和3年度に、感染症対策、自然災害対応のテーマについて、地域バランスや取組内容、対象などを踏まえて、8つの児童館にてモデル事業を実施し、その内容をまとめています。加えて、平成30年7月豪雨において被災した子どもたちの支援に関わった岡山県倉敷市内の児童館職員を対象にしたヒアリング結果も掲載しています。

北海道 札幌市北区

北区6会場合同スペシャルまなべえ 「謎解きゲーム～まなべえランドからの 挑戦状～」

こんな事業

札幌市北区にある6つの児童会館等(原生①②・太平・屯田北・新琴似・男女共同参画センター)を会場とし、「まなべえ(札幌まなびのサポート事業)」※に登録している中学生や学習支援サポーター、コーディネーターが感染症対策に配慮するため、オンライン会議システム(Zoom)を活用した謎解きイベントを実施しました。

当日は、中学生25名、学習支援サポーター(大学生有償ボランティア)20名が参加し、コーディネーター(職員)16名が携わる、合計61名での事業となりました。

事業は3部構成で、第1部では会場ごとに謎解きをし、第2部では他会場と協力して合言葉を探し出し、第3部ではミッションにチャレンジしました。

第1部では、カメラの前で謎解きの答えを発表する際、恥ずかしそうな様子を見せていた中学生でしたが、徐々に中学生が自ら会場に声をかけあい、自発的に隣席し交流を図っていました。第3部のけん玉チャレンジでは、うまくいかない会場を他の会場が助けるなど、様々な体験を通じ、会場の枠を超え交流を深めました。




※「まなべえ(札幌まなびのサポート事業)」とは?

学前に不安を抱える中学生を対象に、各区に学習教室を開設し、大学生ボランティア等の支援により学習習慣の定着を図るとともに、子どもが安心して過ごすことのできる居場所を提供することを目的とした札幌市の事業。

⑧ モデル事業の概要 — 感染症対策 —

モデル事業のプログラム名や、概要などを紹介しています。

【どうやって】

プログラムを実施するために必要な情報をまとめています。

広報、プログラムの内容、備品、体制(スタッフ)など、実際に準備した内容を参考にしています。

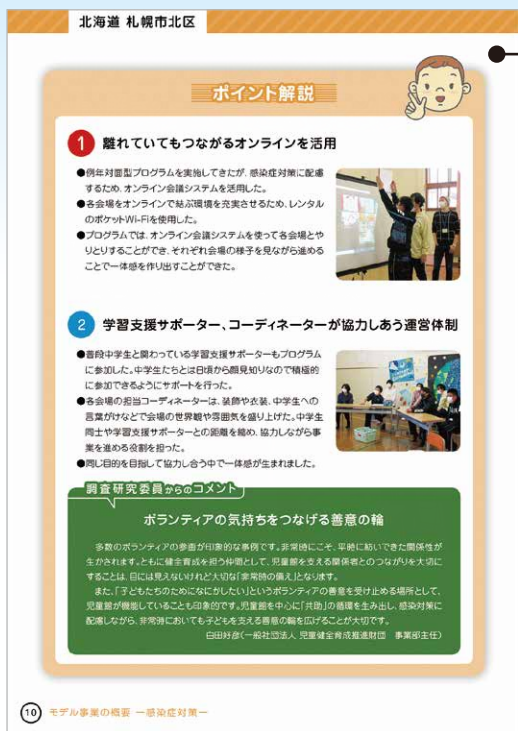
児童館で同じように取り組む場合に参考にしたり、アレンジして実施することもできるでしょう。

どうやって?

広 報	「まなべえ」に登録している中学生にチラシを配布
プログラムの内容	<p>【スペシャルまなべえ「まなべえランドからの挑戦状」】※3部構成</p> <p>※まなべえランドという世界観を演出。悪者にさらわれたお姫様を救出するため、ミッションに挑戦。</p> <p>●第1部：謎解きゲーム(各会場に実施)</p> <p>各会場に隠された封筒(謎が隠されている)を探す。謎解きを繰り返しながら、地図のがらをゲットする。※地図には、お姫様がさらわれた場所が表示されている。</p> <p>●第2部：謎解きゲーム(各会場と協力部)</p> <p>地図のがらだけでなく、合言葉も必要になることがわかる。その合言葉を探するためのミッションを行うとした時、悪者に魔法をかけられ学習支援サポーターは声が出せなくなる。そのため、中学生だけで各会場に話しかけ、「文字」をゲットしなくてはならない。自分の会場以外に隠されている「文字」をゲットし、合言葉を完成させる。</p> <p>●第3部：けん玉ミッション</p> <p>悪者が最後の抵抗を見せ、けん玉勝負を仕掛けてくる。全会場が指定の点数を達成成功させることができれば悪者に勝利。魔法が解かれ、まなべえランドに平和が訪れる。</p>
準 備 物	●各児童会館のパソコン、ポケットWi-Fi、謎解きなど
スタッフ	コーディネーター、学習支援サポーター

⑧ モデル事業の概要 — 感染症対策 —

ハンドブックの構成解説(続き)



【ポイント解説】

プログラム実施にあたって、企画や当日運営、ふりかえりの情報をもとに、参考となるポイントをまとめています。

モデル事業を実施した児童館の特色やこれまでの背景、プログラムを実施するにあたって留意すべきことなどを掲載しています。

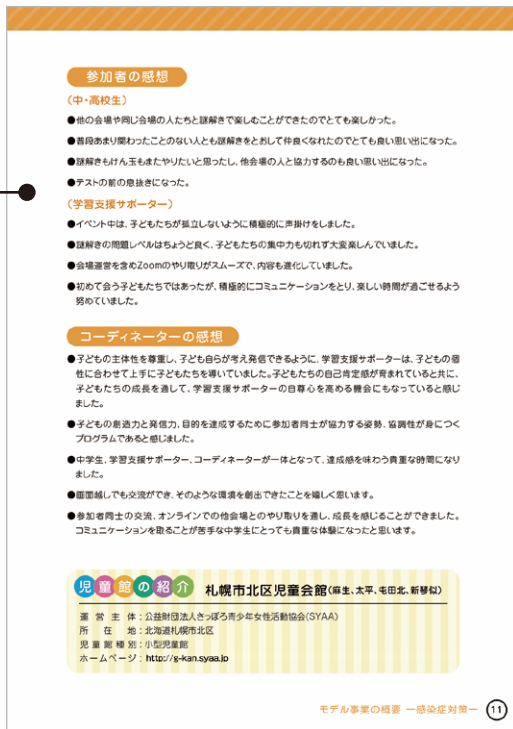
また、調査研究委員(専門家・児童館職員)からの事例に対するメッセージを提供いただいています。

【参加者・職員の声】

モデル事業のプログラムに参加した利用者の声や職員等の感想や意見などをまとめています。

プログラムの効果や実施する上での留意点などとして理解するとよいでしょう。

(※)子どもたちを対象にした遊びのプログラムは上記のような記載となっていますが、保護者などを対象にした相談対応やヒアリング結果は、掲載内容が上記と違ってきます。ご了承ください。



●子どもたちを取り巻く様々な感染症

新型コロナウイルス感染症以外にも、代表的なところでは、季節性のインフルエンザは、例年12月～3月が流行シーズンとなるほか、おたふくかぜ（流行性耳下腺炎）、ノロウイルスやロタウイルスによって引き起こされる急性の胃腸炎、手足口病、風疹、麻疹などがあります。時として抗原性が大きく異なるインフルエンザウイルス（新型インフルエンザ）が現れることもあります。

集団生活をはじめ前の子どもは感染症に対する抵抗力が弱く、集団での生活・活動によって様々な病原体にさらされ、病気にかかりやすくなります。児童館も集団での生活・活動の場であることから、感染のリスクが高まりやすいと言えます。

●基本的な予防方法

子どもがかかりやすい感染症には流行しやすい季節があります。予防接種の有無にも関係するため、流行する季節に差し掛かったら、予防対策が大切です。

基本的に、有効な予防方法は、手洗いの徹底、マスクの使用、適度な湿度の保持、規則正しい生活を心がける、人混みや繁華街への外出を控えるなどが挙げられます。

(参考)

厚生労働省 感染症情報

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/

厚生労働省 インフルエンザ(総合ページ)

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/infulenza/

●感染状況に応じた対応

病気にかかりやすい、広がりやすいことから、児童館では利用を制限することが考えられますが、子どもたちの生活に制限がかかることで、心身へのストレスがかかることとなります。また、感染症の大規模な流行は、日常的な暮らしや経済活動にも大きな制限がかかることで、子育て家庭にも影響を及ぼします。

児童館は、「子どもの心身の健やかな成長、発達及びその自立が図られることを地域社会の中で具現化する児童福祉施設」であり、子どもが、その置かれている環境や状況に関わりなく、自由に来館して過ごすことができると謳われています。もちろん、感染状況によって、利用制限等をしなければならない状況がありますが、感染を回避しながらできることや、感染対策を講じてできることがあるのではないのでしょうか。

(参考)

児童館ガイドライン

<https://www.mhlw.go.jp/content/HP.pdf>

●感染症流行下での児童館活動

令和2年度に実施したアンケート調査からは、緊急事態宣言の発令は児童館の運営に大きな影響をあたえることになり、職員の戸惑いも見られたほか、「やりたかったけど、できなかったこと」も明らかになりました。その後、各児童館では感染症対策も徐々に浸透する中で、感染リスクを抑えながら、子どもたちの遊びをつくりだすことに苦労を重ねていることと思います。

本研究では、全国5つの地域において、感染症対策をテーマとしたモデル事業を実施しました。そのうち3つの児童館(札幌市北区、東京都江戸川区、愛知県北名古屋市)を対象に感染症対策を講じた上での遊びのプログラムを実施し、ほか2つの児童館(新潟県燕市・沖縄県那覇市)では、子どもや子育て家庭への相談対応を実施しました。

●大事にすべきポイント

これら5つの事例の中で特に大事にしているポイントを整理して、紹介します。

①感染症対策を具体的に検討

感染症対策はどの児童館でも同じように実施されているとは思いますが、周知の仕方や具体的な対応には違いもあるでしょう。これらの児童館では、それぞれ自治体から示された方針等にあわせて、工夫しながら対応しています。想定している場面ごとに、具体的に避けるべきこと、子どもたち一人ひとりに取り組んでもらうことなどを検討していました。

②感染症対策のルールを子どもたちに理解してもらう

感染症対策を示すだけでなく、子どもたちに理解してもらうための工夫も見られました。ルールなどを貼り出すだけでなく、日常から職員が周知しており、あわせて遊びのプログラムの実施前や途中の段階で、適宜職員が説明していました。ルールを決めて説明するだけでなく、子どもたちの意見を反映した例も見られました。

③子どもたちの声を丁寧に聞く

感染症が拡大する中、子どもたちは自由に遊ぶことが制限されたり、家庭環境にも変化が生じています。子どもの心身への影響も見られるようになったかもしれません。子どもたちを迎え入れる場面、子どもたちと一緒に遊ぶ場面だけでなく、家庭や児童館外での様子など、子どもの様子を伺うことが大切です。あわせて、様々な場面で子どもの声に耳を澄ます、安心して話ができる場をつくるということが大切です。

④子どもや子育て家庭の置かれている状況を丁寧に理解する

感染症の拡大が与える子どもや子育て家庭への影響は個別性があります。必要に応じて出向いたり、相談を受ける機会をつくり、丁寧に状況を理解していくことが大切です。把握した情報から、子どもや子育て家庭が置かれている状況を見立てて、そこから具体的な対応を考えていくことが期待されます。児童館だけで抱えこまず、必要に応じて、学校や自治体の担当部署、子育て支援の関係機関などと情報を共有し、相談することも必要です。

モデル事業の概要【感染症対策編】

モデル事業の実施にあたっては、本事業の調査研究委員会委員からの助言をもとに、5つの地域で実施しました。

モデル事業の実施にあたって、新型コロナウイルス感染症の流行は地域によって違いもあることから、都市部（政令指定都市、特別区）と地方都市からそれぞれ選出するようにしました。

また、感染症対策を講じた遊びのプログラム実施と、子ども・子育て世帯向けの支援プログラムの2つの種類を実施しました。遊びのプログラムは、対象の年齢層の違いも意識して検討しました。

感染症対策を講じた遊びのプログラム

都道府県 市区町村	児童館名	事業名・プログラム概要
北海道札幌市 ※都市部	麻生児童会館 ほか 北区内4館	【北区6会場合同スペシャルまなべえ「謎解きゲーム～まなべえランドからの挑戦状～」】 学習支援をしている中学生を対象にしたゲーム企画
東京都江戸川区 ※都市部	共育プラザ小岩	【eスポーツ交流会～オンラインで7児童館対決～】 中高生を対象にしたeスポーツ大会。中高生有志が大会の企画にも関わる。
愛知県 北名古屋市 ※地方都市	熊之庄児童館	【くまじ大運動会】 小学生の企画アイデアをもとに実施する感染症対策に配慮した冬の運動会

子ども・子育て世帯向けの支援プログラム

都道府県 市区町村	児童館名	プログラム概要
新潟県燕市 ※地方都市	小中川児童館、 児童研修館 「こどもの森」	【「子育てコンシェルジュ」による相談対応】 国が定める子育て支援員研修を修了した児童館職員によるオンライン無料子ども・子育て相談などの対応
沖縄県那覇市 ※地方都市	国場児童館	【じっくり寄り添いながらすすめる子育て家庭の支援】 児童館利用者向けに食材等の提供・貧困世帯等の相談対応等

北区6会場合合同スペシャルまなべえ 「謎解きゲーム～まなべえランドからの 挑戦状～」

こんな事業

札幌市北区にある6つの児童会館等(麻生①②・太平・屯田北・新琴似・男女共同参画センター)を会場とし、「まなべえ(札幌まなびのサポート事業)」※に登録している中学生や学習支援サポーター、コーディネーターが感染症対策に配慮するため、オンライン会議システム(Zoom)を活用した謎解きイベントを実施しました。

当日は、中学生25名、学習支援サポーター(大学生有償ボランティア)20名が参加し、コーディネーター(職員)16名が携わる、合計61名での事業となりました。

事業は3部構成で、第1部では会場ごとに謎解きをし、第2部では他会場と協力して合言葉を探し出し、第3部ではミッションにチャレンジしました。

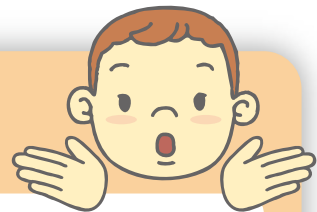
第1部では、カメラの前で謎解きの答えを発表する際、恥ずかしそうな様子を見せていた中学生でしたが、徐々に中学生が自ら他会場に声をかけあい自発的に発言し交流を図っていました。第3部のけん玉チャレンジでは、うまくいかない会場を他の会場が助けるなど、様々な体験を通し、会場の枠を超え交流を深めました。



※「まなべえ(札幌まなびのサポート事業)」とは？

学習に不安を抱える中学生を対象に、各区に学習教室を開設し、大学生ボランティア等の支援により学習習慣の定着を図るとともに、子どもが安心して過ごすことのできる居場所を提供することを目的とした札幌市の事業。

どうやって?



広 報

「まなべえ」に登録している
中学生にチラシを配布



参加します		参加しません	
学年	性別	学年	性別
まなべえID		まなべえID	
参加する方は以下の内容を、Oまたは□に入ってください			
参加希望	参加しない	参加希望	参加しない
参加希望	参加しない	参加希望	参加しない
参加しない方は以下の内容を、Oまたは□に入ってください			
参加しない	参加する	参加しない	参加する
参加しない	参加する	参加しない	参加する
参加しない方は以下の内容を、Oまたは□に入ってください			
参加しない	参加する	参加しない	参加する
参加しない	参加する	参加しない	参加する
参加しない方は以下の内容を、Oまたは□に入ってください			
参加しない	参加する	参加しない	参加する
参加しない	参加する	参加しない	参加する

プログラムの 内容

【スペシャルまなべえ「まなべえランドからの挑戦状」】※3部構成

※まなべえランドという世界観を演出。
悪者にさらわれたお姫様を救出するため、ミッションに挑戦。

●第1部：謎解きゲーム(各会場毎に実施)

各会場に隠された封筒(謎が隠されている)を探す。
謎解きを繰り返しながら、地図のかけらをゲットする。
※地図には、お姫様がさらわれた場所が示されている。

●第2部：謎解きゲーム(各会場と協力型)

地図のかけらだけではなく、合言葉も必要なことがわかる。
その合言葉を探すためのミッションを行おうとした時、悪者に魔法をかけられ
学習支援サポーターは声が出せなくなる。
そのため、中学生だけで各会場に話しかけ、「文字」をゲットしなくてはならない。
自分の会場以外に隠されている「文字」をゲットし、合言葉を完成させる。

●第3部：けん玉ミッション

悪者が最後の抵抗を見せ、けん玉勝負を仕掛けてくる。
全会場が既定の回数を連続成功させることができたなら悪者に勝利。
魔法が解かれ、まなべえランドに平和が訪れる。

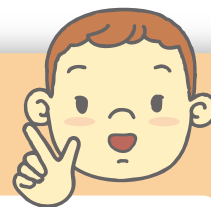
準備物

●各児童会館のパソコン、ポケットWi-Fi、謎解きなど

スタッフ

コーディネーター、学習支援サポーター

ポイント解説



1 離れていてもつながるオンラインを活用

- 例年対面型プログラムを実施してきたが、感染症対策に配慮するため、オンライン会議システムを活用した。
- 各会場をオンラインで結ぶ環境を充実させるため、レンタルのポケットWi-Fiを使用した。
- プログラムでは、オンライン会議システムを使って各会場とやりとりすることができ、それぞれ会場の様子を見ながら進めることで一体感を作り出すことができた。



2 学習支援サポーター、コーディネーターが協力しあう運営体制

- 普段中学生と関わっている学習支援サポーターもプログラムに参加した。中学生たちとは日頃から顔見知りなので積極的に参加できるようにサポートを行った。
- 各会場の担当コーディネーターは、装飾や衣装、中学生への言葉かけなどで会場の世界観や雰囲気盛り上げた。中学生同士や学習支援サポーターとの距離を縮め、協力しながら事業を進める役割を担った。
- 同じ目的を目指して協力し合う中で一体感が生まれました。



調査研究委員からのコメント

ボランティアの気持ちをつなげる善意の輪

多数のボランティアの参画が印象的な事例です。非常時にこそ、平時に紡いできた関係性が生かされます。ともに健全育成を担う仲間として、児童館を支える関係者とのつながりを大切にすることは、目には見えないけれど大切な「非常時の備え」となります。

また、「子どもたちのためになにかしたい」というボランティアの善意を受け止める場所として、児童館が機能していることも印象的です。児童館を中心に「共助」の循環を生み出し、感染対策に配慮しながら、非常時においても子どもを支える善意の輪を広げることが大切です。

白田好彦(一般社団法人 児童健全育成推進財団 事業部主任)

参加者の感想

(中・高校生)

- 他の会場や同じ会場の人たちと謎解きで楽しむことができたのでとても楽しかった。
- 普段あまり関わったことのない人とも謎解きをとおして仲良くなれたのでとても良い思い出になった。
- 謎解きもけん玉もまたやりたいと思ったし、他会場の人と協力するのも良い思い出になった。
- テストの前の息抜きになった。

(学習支援サポーター)

- イベント中は、子どもたちが孤立しないように積極的に声掛けをしました。
- 謎解きの問題レベルはちょうど良く、子どもたちの集中力も切れず大変楽しんでいました。
- 会場運営を含めZoomのやり取りがスムーズで、内容も進化していました。
- 初めて会う子どもたちではあったが、積極的にコミュニケーションをとり、楽しい時間が過ごせるよう努めていました。

コーディネーターの感想

- 子どもの主体性を尊重し、子ども自らが考え発信できるように、学習支援サポーターは、子どもの個性に合わせて上手に子どもたちを導いていました。子どもたちの自己肯定感が育まれていると共に、子どもたちの成長を通して、学習支援サポーターの自尊心を高める機会にもなっていると感じました。
- 子どもの創造力と発信力、目的を達成するために参加者同士が協力する姿勢、協調性が身につくプログラムであると感じました。
- 中学生、学習支援サポーター、コーディネーターが一体となって、達成感を味わう貴重な時間になりました。
- 画面越しでも交流ができ、そのような環境を創出できたことを嬉しく思います。
- 参加者同士の交流、オンラインでの他会場とのやり取りを通し、成長を感じることができました。コミュニケーションを取ることが苦手な中学生にとっても貴重な体験になったと思います。

児童館の紹介

札幌市北区児童会館(麻生、太平、屯田北、新琴似)

運営主体：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会(SYAA)

所在地：北海道札幌市北区

児童館種別：小型児童館

ホームページ：<http://g-kan.syaa.jp>

eスポーツ交流会 ～オンラインで7児童館対決～

こんな事業

中高生による「eスポーツを通じた他館との交流イベント」で、7つの共育プラザをオンラインでつなぎ、SNSでコミュニケーションを取りながらeスポーツ(ゲーム)大会をおこないました。

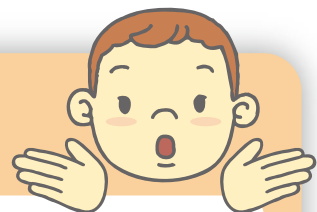
年齢や国籍、障害の有無にかかわらず交流できるeスポーツは、中高生の地域・世代間交流を促進し、地域の一員としての自覚づくりと共生社会の実現を図ることができると考え、年間を通して「eスポーツ実行委員会」が中心になって、活動しています。施設にはパソコンやゲーム機などeスポーツに必要な機材を揃えています。



※「共育プラザ」とは？

江戸川区内に7館ある、中高生世代の支援・子育て支援・世代間の交流支援を行う児童館です。ダンスやライブなど、自分のペースで好きな活動をしたり、勉強をしたりすることができる施設です。不登校等児童を対象として、常駐するユースソーシャルワーカー、ユースカウンセラーなどの専門スタッフを中心に一人ひとりをサポートする「ユースサポート登録」制度があります。

どうやって?



広 報

児童館の公式Twitterで配信、
ポスター掲示



プログラム の内容

●全体のルール解説

各共育プラザのチーム制でトーナメント形式で実施。

制限時間、アイテムの使用等の細かなルールは子どもたちが検討し、事前にオンライン会議システムなどを使い、調整を行った。

●中継

7館をオンライン会議システム、ゲームに特化したコミュニケーションツールによりオンラインで繋ぎ、コミュニケーションを取りながら対戦した。イベントの様子は各館へ映像配信し、選手以外の中高生も視聴できるようにした。

協力体制

他の共育プラザ(平井・中央・南篠崎・葛西・南小岩・一之江)の職員

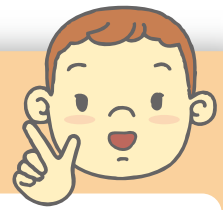
準備物

パソコン、ゲーム機、ゲームソフト、コントローラー、音源用CDデッキ、プロジェクター、スクリーンなど(いずれも元々施設に設置されている)

スタッフ

児童館職員:2名 / 中高生スタッフ4名

ポイント解説



1 区内7館共通・協力事業の実績

- 以前から10代の挑戦EDOGAWA、江戸川区民まつり、共育ステージ、共育プラザ防災フェスなど、7館の共通・協力事業を実施している。
- これらの企画は対面での実施だったため、ほとんど実施することができなくなったことから、eスポーツ大会を企画することになった。他の児童館の子どもたちと交流する機会になっており、子どもたちも楽しみにしている。



2 中高生の有志が企画運営

- eスポーツ大会の企画から、中高生の有志に参加してもらうようにしている。
- 当日までにゲームの内容やルールなどを検討、当日は進行や中継による実況など、運営自体を中高生が実施するようにしている。7館の子どもたち有志がオンラインで会議を行いながら準備を進めた。
- 子どもたちからの要望にあわせて、職員は、パソコン、プロジェクタの設定など、技術・環境整備をサポートしている。

調査研究委員からのコメント

子どもたちの主体性を形にする

この事業が実現できた背景には、コロナ禍以前から継続して事業を育て、設備投資してきた積み重ねがあります。健全育成を止めないために、日常的に様々な取組を開発し、いざ危機的状況に陥った際にとれる「打ち手(とれる手段)」を増やすことが大切です。

児童館では、「子どもの話し合いの場を計画的に設け、中・高校生世代が中心となり子ども同士の役割分担を支援する」など、自分たちで活動を作り上げることができるように援助することが求められます(児童館ガイドライン第4章)。感染症対策の徹底と子どもの主体的な参画は両方が必要であり、「トレードオフ」ではありません。制限下でも工夫を凝らしながら、子どもの権利を体現する施設として、子どもたちの主体性を形にすることが求められます。

白田好彦(一般財団法人児童健全育成推進財団 事業部主任)

参加者の感想

- 友達に誘われて参加したところ、のめり込んだ。ゲームの実況などはYouTubeを見て研究した。普段は、SNSを使って他の児童館を利用しているメンバーともやりとりしている。
- いまは、みんなでワイワイ楽しく参加してくれるので、とても手応えを感じている。大会を通じて、みんなと出会える共通の話題があるので楽しくできる。
- 黙食、マスク着用、消毒など、自分たちでできる感染症対策も考えている。
- とにかくみんな参加してくれるから、大会が盛り上がるし、自分自身も楽しい。ゲームの面白さは、やってみないとわからないので、ぜひ大人や職員のみなさんにも参加してもらいたい。

職員の感想

- コロナ禍において、児童館での利用者も少ない時期があったが、徐々に参加する子どもが増えてきている。
- これまでは、職員から呼びかけていたが、いまはゲーム大会を実施するとなると、運営に関わることを希望する子どもたちが、すぐに集まるようになった。自発的に大会を実施したいという声も出るようになってきている。

ゲームを通じた子どもたちの交流

共育プラザ内でゲームができるようになるには苦労もありました。子どもたちからのリクエストを踏まえて、他地域の児童館などの動向を調べて、平成27年度からできるようになりました。共育プラザでは、子ども主体で進められるように、環境整備を進めています。

児童館ガイドラインには「中・高校生世代は、話し相手や仲間を求め、自分の居場所として児童館を利用するなどの思春期の発達特性をよく理解し、自主性を尊重し、社会性を育むように援助すること。」(子どもの居場所の提供)と記載があります。

いまの子どもたちにとってゲームは、話し相手や仲間を求めるためのコミュニケーションツールとなっています。また、自主性を尊重する形で「eスポーツ実行委員会」などもつくられ、代々後輩の子どもたちが引き継ぐ形になっています。

児童館の紹介

共育プラザ小岩

運営主体：江戸川区

職員数：13名

所在地：東京都江戸川区北小岩2-14-17

利用者数：100名(1日あたり)

児童館種別：大型児童センター

ホームページ：https://www.city.edogawa.tokyo.jp/kyoiku_plaza/plaza_koiwa/index.html

Twitter：https://twitter.com/kyopla_koiwa

Instagram：<https://www.instagram.com/kyoplakoiwa>

くまじ大運動会

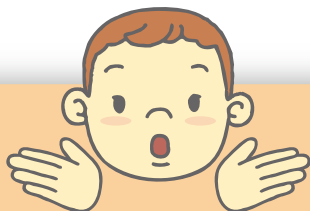
こんな事業

熊之庄児童館では、どのような遊びのプログラムをおこなうか、日頃から子どもたちと一緒に話し合いながら実施しています。今回、子どもたちから要望があった運動会を2年ぶりに実施することにしました。

子どもたちから募集した競技種目から5種目を選び、手を使わずに新聞紙を丸めた棒を使ってわっかのバトンを回すリレーなど、感染症対策を組み入れてアレンジを加えた種目をおこない、感染症対策について楽しく理解・徹底できるように工夫しました。

運動会には86人の小学生が参加し、新しいプログラムの開発につながりました。

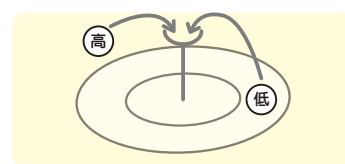
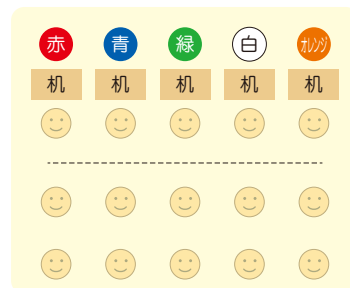




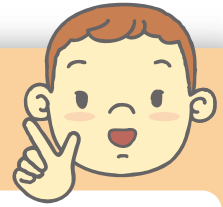
どうやって?



<p>広 報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●児童館だより「くまじだより」に掲載 ●小学生の有志が作成したチラシを館内に掲示
<p>プログラムの内容 (5種目のうち2つを紹介)</p>	<p>【名前でつなげ連想リレー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●競技内容 <ol style="list-style-type: none"> ①職員がお題(例:動物の名前)を言い、そのお題に当てはまるものを紙に書く ②一人一つ書き、書き終わったら鉛筆を持ったまま列の後ろに並ぶ ③制限時間は一つのお題につき5分 ④思いつかない場合は書かずに列の後ろに並ぶ※制限時間内であれば、何周しても良い ⑤5分経ったらチーム担当の職員が一つずつ読み上げる。書いた数が一番多いチームの勝ちとなる ●準備物:鉛筆(人数分)、A4の紙(チーム数分)、机、ストップウォッチ ●子どもに伝える注意事項:鉛筆を持ったまま走らない、待っている間に他の子と相談しない、書き間違えたら、周りに新しく書き直す ●感染症対策:一人一本鉛筆を用いることで物の媒介による接触感染リスクを減らす、待機中、間隔をあけて座ることで、密集を減らす <p>【一球入魂!一球に思いを込めろ!!リレー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●競技内容 <ol style="list-style-type: none"> ①低学年(1~3年)は内側の円、高学年(4~6年)は外側の円で広がる ②一人2球持つ(赤1点・白2点) ③先生の合図でどちらか一球投げる ④二回目の合図で二球目を投げる ⑤入った玉の数を集計する ●準備物:玉入れ棒、赤白ボール(人数分)、使用したボールを入れるかご、 ※高学年用円→5m、低学年用円→3mを描く。 ●始まる前に子どもに伝える注意事項:二球同時に投げない、マスクは外さない、待機中は座る ●感染症対策:待機中に密にならないように間隔をあけて座る、一度使ったボールは接触感染を防ぐため、再利用しない
<p>準備物</p>	<p>日常的に児童館で使用している物を活用</p>
<p>スタッフ</p>	<p>児童館職員:8名/地域ボランティア:2名</p>



ポイント解説



1 子どもたちの意見を聞き、運動会のプログラムづくり

- 事前に、競技種目を子どもたちに募集したほか、子どもたちの意見を聞き、感染症対策に配慮した競技内容に改変した。
- 子どもから「運動の嫌いな子どもも参加できる競技があるとよい」という意見があり、運動が苦手な子どもも参加できる競技を考え、参加した子どもたちが全員楽しめる種目を職員で調整した。



2 競技種目に、感染症対策を組み入れてアレンジを加えた

- 感染症対策がとれる種目を精査し、競技時間も短時間にしたほか、競技種目ごとに感染症対策のルールを設定した。競技前にルールを伝えた上で、実施するようにした。
- 子どもたちから「ルールを設定するなら、ルールを守った場合に点数をつけて欲しい」との声があり、大声を出さず、気持ちで応援する場合に得点される「マナー点」を当日に導入した。



調査研究委員からのコメント

子どもたちとともに考え、工夫すること

子どもたちに感染症対策を伝えるうえでは、注意すべきことを具体的に、端的に、わかりやすく提示することが大切です。職員がマスクの着用、応援時における声のボリュームなどを、身振り手振りを加えながら、わかりやすく子どもたちに説明していました。子どもたちに合わせて各現場で工夫が求められます。

感染症対策については、どこまで徹底したとしても「ゼロリスク」は難しい現状があります。大切なのは、取り組む職員、そして参加する子どもたちで話し合い、「納得のしどころ」を見出すことです。子どもの最善の利益を保障する児童福祉施設として、子どもを感染症から守りつつ、子どもたちとともに感染を避ける遊び方・過ごし方を考え、工夫することが求められます。

白田好彦(一般財団法人児童健全育成推進財団 事業部主任)

子どもの感想

- 今回の運動会は、いろんな体験ができて、たくさんの思い出ができた。
- 今までの運動会と違って、自分たちの意見が採用されて、競技ができたことはとても良かった。
- 自分たちで考えて、意見を出していくことも楽しいし、自分の意見が選ばれると、なお楽しい。
- これからも、自分たちがアイデアを出し合って、児童館のみんなで楽しむことができたらいいと思う。

職員の感想

- 子ども同士が繋がりを持った運動会を実施できて、楽しかった。
- 競技内容は感染予防に配慮して実施したが、普段の運動や遊びをアレンジしたことで、新たな遊び方を発見できてよかった。
- 久しぶりにイベントを実施したことで、新たな課題、気づきがあり、今後見直したり、感染症対策をした上で、子どもが楽しい場面を大切にしていきたい。

日常的に、話し合いながら遊びのプログラムを実施

児童館では、月1回「じぶんで作ろう会」を開催し、遊び、ルールを決める話し合いの機会を設けて、子どもたちの考える力が育まれるよう働きかけています。そのほかにも、普段から職員と子どもたちで話し合っただけで感染症に配慮した遊びのルールを考えるようにしています。また、行事ごとに、子どもたちの中から実行委員を選出し、行事の企画や運営担当を決めているそうです。

このように、日常的に子どもたちが職員と話し合いながら感染症対策をしていることが下地にあり、イベントでの企画から子どもたちの考えを反映することがスムーズに取り入れられるようになっていきます。

児童館の紹介

くまのしょう 熊之庄児童館

運営主体：特定非営利活動法人 在宅福祉の会 じゃがいも	職員数：4名
所在地：愛知県北名古屋市熊之庄城ノ屋敷2985	利用者数：150名
児童館種別：小型児童館	(1日あたり)
ホームページ： https://www.city.kitanagoya.lg.jp/jidou/1500016.php	

「子育てコンシェルジュ」による 相談対応

こんな取り組み

燕市では、児童館、児童クラブ、子育て支援センターの職員を対象に、国が定める子育て支援員研修(地域子育て支援コース)を実施し、修了者を「子育てコンシェルジュ」として配置しています。

妊娠や出産、子どもの発達など、子育てに関するさまざまな相談・悩みごとの聞き取り役となり、必要に応じて関係機関へつないでいます。

また令和3年9月2日より、コロナ禍でも安心して相談が行えるよう、市内に住む0歳から15歳の子どもの保護者や、子ども本人を対象とした、オンライン相談窓口を開設しました。(オンライン会議システムZoomを活用)

※コンシェルジュによる子育て相談は全施設(8つの児童館、11つの児童クラブ、7つの子育て支援センター)で対応していますが、令和4年3月現在、オンライン相談は一部施設となります。



相談対応 について

相談の方法は、オンライン、電話で受け付けているほか、来館時の対応もしています(※令和4年3月現在)



方 法	内 容・特 徴
オンライン	<ul style="list-style-type: none"> ●相談時間は、水曜日を除く毎日、午後2時30分からと午後3時30分からの2回、1回につき30分程度。 ●市のホームページにあるフォームから申し込み。 ●外出が難しい場合などにオンラインが選ばれている。感染の心配がないので、今後さらに感染拡大すると利用のニーズが高まる可能性がある。 ●話を引き出すのが難しい部分もあるため、テーマを決めてオンラインのおしゃべり会も実施。
電 話	<ul style="list-style-type: none"> ●オンラインでの相談に慣れない人が選んでいるほか、匿名性が高いため、選ばれているように感じている。
来 館	<ul style="list-style-type: none"> ●来館した際にかわす会話から相談に発展することが多い。

相談記録

相談内容は共通のフォーマットで記入し、関係機関に情報共有しています。

記入する情報

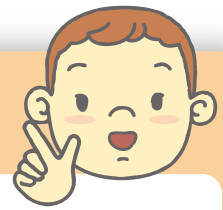
- 日時
- 相談員(対応者)の所属・氏名
- 相談内容(複数選択可):身体・知的/病気/生活・食事/人間関係/
保育園、学校関係/保護者自身/その他
- つないだ関係機関(複数選択可):保健センター/子どもサポート係/その他
- 相談内容
- 相談時間(開始～終了の時間、対応に要した時間記入)
- 相談員の所感
 - ※話を聞いた人が、相談してきた方が、どうなったかを判断し記入しています。
 - ・満足度:とても満足/満足/やや不満足/不満足
 - ・満足度の理由(複数選択可)
 - 提供した情報が参考になった/ならなかった
 - 解決の糸口が見えた/見えない
 - 取組や対応が見つかった/見つからない
 - 困りごとが整理された/されない
 - 話すことで気持ちが楽になった/ならない
 - その他()

相談事案(例)

対応者の所感では、相談の傾向はコロナ禍以前とあまり変わらないようですが、下記のような相談が寄せられています。

相談者	内容	相談の受け方
未就学児の 保護者	離乳食、断乳、こどもの発達(ハイハイ、つかまり立ち)、お出かけスポットなど乳幼児の子育て全般に対する相談	オンライン(他講座の参加者に声かけ、おしゃべり会に発展)
	入園準備、子どもの発育、自身の体調(妊娠中)	オンライン
	夜泣き、子育て中の孤独感	オンライン
祖母	子どもの発育に関する相談(トイレトレーニング)	来館時
未就学児の 父親	母親(妻)が緊急入院してしまい、これから子育てをどうしたらいいか	来館時
子ども本人	いじめに関する相談	来館時

ポイント解説



市全体で子どもを見守るための連携が取れている

- 相談記録は市の担当部署で共有されていることから、担当者が確認して、必要があれば、他の機関につなぐようにしている。緊急性があるなど特に心配な案件は、すぐに市から他の施設に情報共有するようにしている。
- これまでよりも、他の関係機関の状況も見えるようになったことから、連携がとりやすくなった。



調査研究委員からのコメント

子どもを持つ親にとってかけがえのない存在

どの児童館、教育機関でもオンライン環境の活用には難しさがあるように思いますが、少しでもオンライン環境を整えていることを周知することが大事だと思います。

燕市の子育てコンシェルジュのような存在が、身の回りにいたら、子育て世帯にとってはとても助かるでしょう。子どもを持つ親は、悩みがあってもほかの子どもと比べてしまったり、客観的に考えることが難しいことがあります。子育ての専門的な知識や経験を持っている方に相談できたり、親身になってアドバイスしてもらえる機会は貴重であり、相談できることで悩んでいた親も気持ちも軽くなるでしょう。

対人援助の専門的な研修を受けて対応いただけることで、地域の中の児童館や職員の役割がより明確になって、意識して対応していただけることを期待しています。

富川万美(NPO法人ママプラグ理事)

ワンストップ型の子育て支援サービスの重要性

突然の災害により被災をすると、子どもが夜泣きをする、赤ちゃん返りをする、それまでできていたことができなくなる等、いつもとは違う様子がみられることがあります。そうすると、子どもの成長に災害が影響を及ぼしているのかも、と気にしがちです。また、慣れない避難所での生活や、家族宅での避難生活は、対人関係に気がつかうものです。いろいろなことを考えすぎると、不安な気持ちはどんどん大きくなります。

そのような時に、「子育てコンシェルジュ」のような、ワンストップでさまざまな困りごとを相談できるサービスがあると、気軽に相談でき、かつ必要な支援につないでもらうことができ頼りになります。このようなワンストップ型の子育て支援サービスを、平常時だけでなく、災害時にも利用できると、被災した子育てをしている人の生活の支えになると期待しています。

阪本真由美(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授)

小中川児童館職員の感想

- 一人ひとりに応じた対応をすることを心がけており、気になることやトラブルなどがあれば、付箋に書いてすぐに全職員で共有するルールにしています。また、週1回開催する職員会議は議事録をとり、あとから読み返せるようにしています。
- 児童クラブを併設しているため、お迎えに来た保護者と職員とのコミュニケーションの積み重ねも重要と感じています。テレワーク制度の導入により、父親によるお迎えも増えました。
- SNSでのいじめに関する情報を小学校に共有したところ、3年生以上冬休みの宿題で「我が家のメディアルール」を家庭で相談してつくることにつながりました。
- コロナ禍で生活が厳しいなどの家庭状況も見えるので、子どもたちには、せめて児童館では楽しい時間、幸せな時間を過ごしてほしいと思っています。

こどもの森職員の感想

- 広域の子育て支援施設として、様々な地域からの来館があります。「表情がよくないな」というような、気になる来館者は、職員が観察して様子を共有するようにしています。他の児童館などからの情報も参考に应对していることもあります。
- コロナ禍で、経済的に厳しい家庭があることを想定して、参加費がかからないイベントを開催するようにしています。
- 以前、不登校の子どもの対応として、こどもの森への来館を、学校の出席数として扱った事例もあります。2か月ほど来館し、滞在時間と学校と共有して、学校の出席数としてカウントしたものです。児童館としてできる対応を今後も考えたいです。

児童館の紹介

こながわ 小中川児童館

運営主体：燕市	職員数：11名
所在地：新潟県燕市小古津新19-1	利用者数：55名(1日あたり)
児童館種別：小型児童館	
ホームページ： https://www.city.tsubame.niigata.jp/soshiki/kyoiku/2/86/841.html	

こどもの森

運営主体：燕市	職員数：5名
所在地：新潟県燕市大曲3355	利用者数：40名(1日あたり)
児童館種別：小型児童館	
ホームページ： https://www.city.tsubame.niigata.jp/soshiki/kyoiku/2/86/687.html	

じっくり寄り添いながらすすめる 子育て家庭の支援

こんな取り組み

那覇市の南東にある住宅地域にある国場児童館。しつけや日常生活のサポートが必要な子どもが多い傾向にあります。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、子どもたちとその家庭にも変化が生じています。そういった子どもたちの様子の変化を察して、日々寄り添いながら、必要に応じて、社会福祉協議会(社協)や地域から提供いただいた食材を届けるなど、丁寧な対応を進めています。



感染症が拡大する中での対応・経緯

令和2年の緊急事態宣言の発令後、児童館利用を制限することになったため、地域の中でも気になる家族を中心に様子を見に行くようにしました。地域の店舗から、弁当提供の申し出があり、職員と話し合い、必要と思われる家族に連絡をして、受け取りの際におしゃべりをしながら渡すなど、話をする機会をつくるようにしました。

多くの家庭は、支援を受けることに抵抗感があるため「うちはそんなに困っていない」と言われたこともありました。そこで、食材提供があったら、子どもの様子を見るために声をかけて、食材を児童館に取りに来てもらうようにしました。

児童館が再開してから、近くに借りた畑を使って子どもたちと食を楽しむ時間を作るようにしました。

食材等の提供について

成長過程で大人や社会から支えられた経験がとぼしいまま大人になった保護者は、苦しい状況でも相談せず耐えてしまい、支援を受けることにハードルを感じて、遠慮してしまいがちです。

そのため、児童館では、職員と保護者との日頃からの関係性を土台に、食の支援というよりは、「おすそわけ」という意識を持って、対応することにしました。

おすそわけの手順

- ①提供した方が良いと考えられる子どもたちのことを職員間で話し合う(所得が減少したことが分かる家庭や多子世帯を中心によく児童館を利用する子ども)
- ②提供した方が良いと考えられる子どもの分は、より少し多めに食材を小分けに準備する。
- ③提供したい子どもたちの他にも必要としている子どもたちがいる可能性があるなので、様子を見ながら「おすそわけ」する(保護者と連絡がとれる場合は直接連絡したり、きょうだいを通じて提供する場合もある)

職員の感想

- おすそわけすると、子どもたちのとても喜んだ顔を見ることができます。そういった様子を見ると、子どもたちは普段から遠慮しているのだと感じます。
- 子どもたちと接する時間をできるだけ多くとるようにして、ゆとりを持って対応できる環境にしています。

●那覇市社協から提供いただいた食材

- ・お米6袋(5キロ3袋、7キロ3袋) ・缶詰42個(シーチキン30個、ポーク12個) ・ホールケーキ6個
- ・麺類13袋(パスタ7袋、5個入りインスタントラーメン6袋) ・レトルト34食(ミートソース13食、カレー15食、みそ汁6袋)
- ・その他(生理用ナプキン8、カロリーメイト20、お好み焼き粉3、黒糖6、ホットケーキミックス2、ゼリー45)

農作業と料理を通じた「団らんの場づくり」

児童館が再開してからは、児童館の庭にハーブを植えたり、児童館の近くに借りている畑で農作業をしたり、収穫した作物を使った料理などを通じて、気軽に子どもたちが楽しめるようにしました。また子ども達の様子を見ながら、児童館の外に遊びに行ったり、ちょっとした企画(工作など)ができるようにしています。

近くの畑では、地域の方に協力してもらいながら作物を育てています。この菜園で収穫した野菜を使って料理をすることもあります。おなかが空いている子どもがいたら「ヒラヤーチー」(沖縄式のお好み焼き)を一緒に作ります。また親の帰りが遅い子どもには、意識して料理の仕方を教えることもあります。

このように一緒に料理を作って食べることを通じて、「団らん」の場になることを意識しているそうです。一緒に作りながら、食べながら話をする中で、子どもたちは家のできごと、悩みなど、いろんな話をしてくれます。そういった話から子どもたちの家庭の様子も分かるようなことがあります。

気になる子どもたちへの対応

職員のみなさんは、子どもたちの負担感を感じさせないような声掛けを意識しているそうです。例えば、洋服をおすそ分けするときにも、「似合いそうだから持って行って」と言葉を添えて渡したり、譲られた洋服を子どもが持って帰った際に、「洋服のおさがりはみんなに声をかけるようにしていて、特別なことではないこと」を説明した手紙を添えるなど、保護者の方が気兼ねなく受け取れるように工夫しているそうです。

子どもの様子から気になることがあれば、「どうしたの?」「気になることがある?」とすぐ聞くようになっています。また状況に応じて、学校や家庭に電話を入れ、協力してサポートするようになっています。

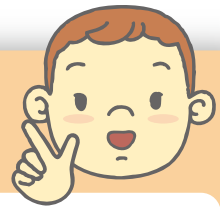
保護者にも気にかけてもらいたいこと、親としての関わり方を考えてもらうようにしながら、「ひとりで悩まないで」といつでも相談してもらえるように心がけています。

職員同士の配慮や工夫

- 日常的な声掛けが習慣化するようにしています。また、児童館閉館後の30分ほど職員が残るようにしており、その時間に、一日の出来事や気になることなどを気軽に共有するようにしています。
- 児童館オリジナルの日誌を作成し、適宜、書き込みができるようにしており、内容を共有しながら、気になる子どもに丁寧な対応ができるようにしています。
- 一人ひとり子どもが抱えていることが違うこともあり、どういう対応がよいのか分からないこともあります。職員ひとりで抱え込むことになると負担も大きいので、職員それぞれの役割を持って関わるようにしています。
- 子どもたちのトラブルや問題が起きたとき、いろんな方向から解決策を考えるようにしています。「正解」はないけれど、こういった態度や行動は「見過ごすことはできない」という感覚を大事にして、職員同士で話し合うようにしています。
- なかなかうまくいかない場合もあるので、そういうときは、「失敗はない、次がある」「ずっと関わり続けていることに意味がある」と言い聞かせて、関わり続けています。
- 専門的な知識や情報が必要な場合もあります。そういったことを意識して、館長は研修や勉強会などの情報を意識的に提供しながら、児童館で何ができるのか考えてもらえるようにしています。
- じっくり子どもたちに寄り添う時間を大切に、気軽に過ごしてもらえるように「まちの保健室」のような役割が担えるようにしたいと考えています。



ポイント解説



日頃から地域や関係機関との協力体制

- 特別の支援と見えないように配慮した一方、普段からの関係機関とのつながりを活かして対応するようにした。
- 日常的に、地域のお祭りや催事には顔を出すようにして、地域の自治会や民生・児童委員、社協、学校などとのコミュニケーションは積極的に行っていた。そのため、社協から、食材提供の申し出につながったり、協力が得やすい関係ができています。
- 地域の人と積極的に繋がりを持ち、子どもたちに姿を見せることで、いろんな人たちが子どもたちの周りにいて気にかけていることを知ってもらえるように意識をしている。

調査研究委員からのコメント

子どもたちとともに考え、工夫すること

「支援を必要としている家庭ほど、助けてといえない。だから、食料やお菓子を「おすそわけ」で受け取ってもらっている」という言葉が印象的でした。国場児童館の活動は、一見なんでもない、日常の活動です。とはいえ、コロナ禍で一層深刻となった家庭の経済状況の悪化に際し、支援を押し付けるものではありません。「親の仕事が減ったんだよ。ゲームも売ったし」という子どものひとことから、「たくさんもらったから」と食料を持っていくような、ひとりひとりの子どもの声からそっと手を差し伸べる試みです。

問題行動を起こす子どもを困った子だと排除するのではなく、問題に直面して困っているのかもしれないと捉えるまなざしは、児童館ガイドラインを具現化するものでありコロナ禍により求められるものです。

安部芳絵(工学院大学 基礎・教養部門 准教授、
厚生労働省社会保障審議会児童部会 放課後児童対策に関する専門委員会
遊びのプログラム等に関する専門委員会 専門委員)

児童館の紹介

こくば 国場児童館

運営主体：一般社団法人 沖縄じんぶん考房
所在地：沖縄県那覇市国場353
児童館種別：小型児童館
ホームページ：<https://kokuba19860501.ti-da.net/>

職員数：8名
利用者数：80名(1日あたり)

基本的な考え方【自然災害対応編】

●災害による被害を理解する

日本は、自然的条件から各種の災害が発生しやすい特性があり、毎年のように水害（風水害・土砂災害）（以下、水害とよぶ）、地震・津波等の自然災害が発生しています。2011年（平成23年）の東日本大震災や2016年（平成28年）の熊本地震、2018年の平成30年7月豪雨、令和元年においても房総半島台風や東日本台風により大規模な被害を受けました。そのほか、火山の噴火、大雪などが発生しています。

これらの自然災害は過去に起こった情報をもとに、自治体では、予測した内容を地図に示した「ハザードマップ」を作成して公表しています。このマップには、水害の浸水予測範囲、土砂災害の発生が想定される場所、地震の揺れの大きさ、津波が浸水する範囲、火山噴火に伴う火砕流や降灰の範囲などが示されています。

（児童館でできること）

- ①自治体が公表している災害ごとの「ハザードマップ」を入手する
- ②児童館においてどのような被害が想定されるのか、確認する
- ③想定被害に応じて、児童館の対応を職員同士で話し合う

●あらかじめ避難するタイミングを考えておく

水害、大雪、津波などは、気象観測などをもとにある程度予測ができます。テレビニュースなどで紹介されている気象情報などを参考にして、児童館での対応を判断することが求められます。

（児童館でできること）

- ①災害に関する情報入手の手段を決める（インターネットのニュースサイト・ラジオ・テレビ等）
- ②避難するタイミングを決める
- ③具体的な避難先や避難ルートを検討する

参考：避難の理解力向上キャンペーン実施中!!（内閣府防災情報のページ）



※1 市町村が災害の状況を確実に把握できるものではない等の理由から、警戒レベル5は必ず発令される情報ではありません。

※2 避難指示は、これまでの避難勧告のタイミングで発令されることとなります。

※3 警戒レベル3は、高齢者等以外の人も必要に応じ普段の行動を見合わせ始めたり、避難の準備をしたり、危険を感じたら自主的に避難するタイミングです。

基本的な考え方【自然災害対応編】続き

●災害発生からの経過

①災害発生直後	②災害発生から3日間(72時間)程度	③災害発生3日から2ヶ月程度	④災害発生から2ヶ月以降
自然災害の発生したとき、まずは命を守る行動がなにより大事になります。水害などの場合は、安全な場所に避難すること(安全な場合は移動しないこと)、地震の場合は、怪我をしないように身を守る行動をとります。	子どもたち、職員の命と安全を確保する時期です。被害によって身の回りは大きく変わることがありますが、子どもたちを保護者に受け渡したり、職員自体も安全な場所で過ごすこととなります。	被災した地域の住まいに大きな被害があった場合は、避難所での暮らしや被害のあった家屋での生活を送ることになります。児童館の被害の度合いによって、児童館自体が使えなくなることになります。	避難所が解消したり、応急仮設住宅など仮の住まいが建てられるようになります。元ある暮らしを取り戻していくために、地域住民や関係機関と協力して、子どもたちのケアや復興を進めていきます。

●フェーズにあわせた児童館活動

このように災害発生から、時間の経過とともに子どもたちの置かれる状況も変化します。児童館では、こういった状況にあわせた対応を考える必要があります。

災害による被害によって、一時的にも児童館が利用できないときや、子どもたちの生活に変化が生じるようなときには、「子どもの遊びや居場所を取り戻すこと」を考える必要があります。

「災害で大変なときに」と思われることもあるでしょうが、災害による混乱や暮らしの変化の中で、子どもたちへの配慮は忘れられがちで、取り残されやすい状況に置かれます。児童館ガイドラインでは、「児童館は、子どもが、その置かれている環境や状況に関わりなく、自由に来館して過ごすことができる児童福祉施設」とあります。災害時に置かれている環境や状況に関わりなく、「子どもたちが安心して遊ぶことができる場所」を提供することを考える必要があるのではないのでしょうか。

児童館が無事であれば、子どもたちを迎え入れるようにしますし、被害によって児童館が使えなくても、子どもたちが遊べる場所や遊ぶ道具を提供することができます。普段から子どもの遊びと居場所を提供している児童館だからこそできることと言えます。

災害から元の暮らしのようになるまでには時間を要します。元ある暮らしに戻れた人がいる一方で、戻れないままの人もいるようなことも起こりえます。そういった中でも、被災した人や子どもに配慮して、安心して過ごせる場を提供することも考える必要があります。

●平時からの備え、検討の必要性

災害の被害などは実際に起きてみないとわからないこともたくさんありますが、ハザードマップや過去の災害での対応などを参考に、災害後の対応をイメージすることはできます。

時間の変化とともにどういった児童館活動ができるのか、そのためにどういった準備をしておくかよいのかを考えておくことができれば、災害時に少しでも落ち着いて対処できるように思います。

そして、これらの対応を考える上では、自治体の防災・危機管理担当部署や地域で実践している自主防災組織、または災害救援や防災を専門とするNPOなどに相談するのがよいでしょう。あわせて、児童館職員同士と一緒に話し合うことが欠かせません。利用する子どもたちへの啓発などとセットにして、災害時の対応を考えていくことが望ましいです。

●大事にすべきポイント

①日頃からの児童館同士、児童館以外のつながりをいかす

災害時には、児童館職員だけで対応するには限界があります。災害発生直後は限られた人たちでの対応になりますが時間の経過とともに、他の児童館職員や、地域の住民、学校や子育て支援機関などと協力しあって、子どもたちの遊びと居場所づくりを考えていく必要があります。日頃からのつながりがあれば、協力をお願いしたり、相談しやすくなります。

②児童館の特徴や強みをいかす

児童館の立地条件、利用する子どもたちの年齢層、実施しているプログラム内容などは、児童館によって特徴は様々です。また、日頃から力を入れている取組・強みといえることもあります。こういった状況を客観的に整理しながら、災害時に「できること」、「やったほうがよいこと」などを考えるとよいでしょう。災害前と同じような状況をすぐに取り戻すことはできなくても、まずは始めること、少し時間が経ってから取り組むことなど、優先順位を考える際に役立つはずです。

③子どもたちと一緒に取り組む

災害時、子どもたちへの配慮は忘れられがちで、取り残されやすい状況にあると書きました。まずは子どもたちがどういった状況にあるのか知ることが大事です。そして、子どもたちの意見を尊重しながら、徐々に子どもたち自らの力で遊び、生活することをサポートしていく視点を忘れてはなりません。一緒に災害を乗り越える、一緒に遊びや居場所を取り戻すという姿勢が、なにより子どもたちの成長にもつながるといえるのではないのでしょうか。

児童館ガイドラインより関連内容の抜粋

（第4章 児童館の活動内容、3 子どもが意見を述べる場の提供）

- (1) 児童館は、子どもの年齢及び発達に応じて子どもの意見が尊重されるように努めること。
- (2) 児童館の活動や地域の行事に子どもが参加して自由に意見を述べるができるようにすること。
- (4) 子どもの自発的活動を継続的に支援し、子どもの視点や意見が児童館の運営や地域の活動に生かせるように努めること。

（第7章 子どもの安全対策・衛生管理 4 防災・防犯対策）

- (1) 災害や犯罪の発生時に適切な対応ができるよう、防災・防犯に関する計画やマニュアルを策定し、施設・設備や地域環境の安全点検、職員並びに関係機関が保有する安全確保に関する情報の共有等に努めること。
- (4) 災害発生時には、児童館が地域の避難所となることも考えられるため、必要な物品等を備えるように努めること。

（第8章 家庭・学校・地域との連携、3 地域及び関係機関等との連携）

- (3) 子どもの安全の確保、福祉的な課題の支援のため、日頃より警察、消防署、民生委員・児童委員、主任児童委員、母親クラブ、各種ボランティア団体等地域の子どもたちの安全と福祉的な課題に対応する社会資源との連携を深めておくこと。

モデル事業の概要【自然災害対応編】

モデル事業の実施にあたっては、本事業の調査研究委員会委員からの助言をもとに、3つの地域で実施しました。

モデル事業の実施にあたっては、想定する災害や被災経験の有無などを踏まえて候補となる地域を検討し、それぞれ該当する地域から選出しました。

加えて、平成30年7月豪雨で大きな被害のあった岡山県倉敷市での対応についてもヒアリングを行い、コラムとしてまとめています。

地震災害・風水害両方を想定

都道府県 市区町村	児童館名	事業名／プログラム概要
宮城県 仙台市	仙台市八本松児童館	【いざ!に備える親子防災プロジェクト】 子ども、保護者向けの多様な防災プログラムの実施を通じた災害時の児童館の役割検討
兵庫県 神戸市	魚崎児童館	【防災プログラムと災害対応を考えるワークショップ】 乳幼児世帯向けと、災害の種類にあわせた児童館の対応を考える職員を対象にしたワークショップの実施

風水害の被災経験有

都道府県 市区町村	児童館名	事業名／プログラム概要
愛媛県 松山市 西予市	えひめこどもの城／ 西予市野村児童館	【とり+かえっこinのむら2021】 被災した子どもなどを対象にしたおもちゃかえっこプログラム

【コラム】被災地での子どもの居場所・遊び場づくり

岡山県倉敷市の真備児童館他市内の職員を対象に、平成30年7月豪雨時の児童館職員の対応に関するヒアリング

いざ!に備える 親子防災プロジェクト

こんな事業

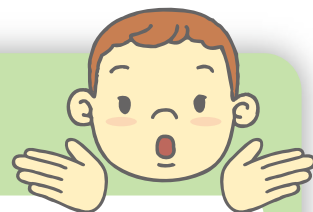
2011年東日本大震災当時、八本松児童館は乳幼児親子の避難所となりました。それから10年が経過し、転入者も多く、当時を知る人は少なくなり、小学4年生以下は震災を体験していない世代となっています。3年前から、平時から緊急時・災害時における児童館の役割を利用者とともに考えようと、防災ダンボールキャンプをはじめとした防災イベントを実施しています。

今年は、乳幼児から小学生の親子を対象に、第1部は「デイキャンプ」として、避難所のファミリースペース見学や車いす体験などのフィールドワークをおこない、第2部は防災クイズの他、実際に避難所に宿泊体験をする「宿泊キャンプ」をおこないました。

それぞれデイキャンプ7組、宿泊キャンプ6組の親子が参加し、「堅苦しくなく、子どもと一緒に色々体験できて良い経験になりました」などの感想が聞かれました。

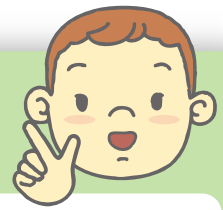


どうやって?



<p>広 報</p>	<p>児童館の公式SNS(ブログ、Instagram、Facebook)で配信、報道各社へのプレスリリース</p>
<p>プログラムの内容</p>	<p>●親子向け防災キャンプ</p> <p>【第1部】デイキャンプ(乳幼児～小学生の親子対象)</p> <p>13:15～ 参加者受付</p> <p>13:30～ 事業開始・挨拶・事業説明</p> <p>13:45～ 地域避難所運営の方からの講話(東日本大震災の際の対応等)</p> <p>14:15～ 遊戯室内にテント設営・ファミリースペース見学</p> <p>15:00～ フィールドワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親子防災クイズ ・車椅子を使って、公園を回ってみよう ・リアカーを使って、物を運んでみよう ・マッチで火起こし体験 <p>16:00～ アルファ米・水の配布、解散</p> <p>【第2部】宿泊キャンプ(小学生以上の親子対象)</p> <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="background-color: #e0f2f1; padding: 5px; margin-right: 10px;">1日目</div> <div> <p>17:45～ 参加者受付</p> <p>18:00～ 事業開始・挨拶・事業説明・防災クイズ</p> <p>19:00～ 寝床づくり</p> <p>20:00～ マッチで火起こし体験</p> <p>20:45～ 就寝準備</p> <p>21:00～ 就寝</p> <p>22:00～ 完全消灯</p> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: #e0f2f1; padding: 5px; margin-right: 10px;">2日目</div> <div> <p>6:30～ 起床・寝床を片付け</p> <p>7:00～ ラジオ体操・朝の散策</p> <p>7:30～ 朝食配布(アルファ米・水の配布)、解散</p> </div> </div>
<p>協力体制</p>	<p>①仙台市より、ダンボールベッド2台の貸与</p> <p>②太白区より、備蓄品(アルファ米・水)の提供</p> <p>③太白区社会福祉協議会より、車椅子2台と職員の派遣</p> <p>④八本松地区町内会 避難所運営委員会より防災講話</p> <p>⑤仙台市立郡山中学校より、ファミリーテント4台の借用とボランティアの派遣</p> <p>⑥リッキーアカデミー(放課後等デイサービス)より職員の派遣、防災クイズの実施</p>
<p>スタッフ</p>	<p>児童館職員:7名/関係機関職員:4名/町内会関係者:3名/ 郡山中学校ボランティア:8名/学生ボランティア:2名</p>

ポイント解説



1 日常的に児童館とつながりがある組織・団体などの協力を得て実施

- 八本松児童館では、日頃から地域の自治会の会合に参加し、役員の方と顔見知りになっていたことから、今回のプログラムを実施するにあたっても協力が得られやすくなっていた。郡山中学校とは日常的なやりとりもあり、資機材の貸与だけではなく、児童館を利用したことがある中学生にもボランティアとして参加していただいた。
- 災害時には、隣接する市民センターが避難所になるため、子どもたちや子育て世帯のために、児童館を開放することも念頭においている。このようなつながりは、災害時にも有効に機能するものと言える。

2 毎年継続して実施することで、防災知識の更新、発展

- 八本松児童館の館長は、東日本大震災当時、別の地域の児童福祉施設で被災した経験がある。当時の経験を伝えるためにも、継続的に防災のプログラムを実施している。自身の経験をもとに、他の児童館で実施されているプログラムなどを参考に企画されている。
- これらの取組は、災害時の児童館の果たす役割を、職員などに理解してもらうためにも大事な機会になっている。



調査研究委員からのコメント

人が集まる、協力しあう開かれた児童館

災害時には、様々な人たちの協力や支え合いが欠かせません。この事業にはいろいろな人たち、いろいろな世代が参加しており、魅力的なプログラムと言えます。小学生を対象にしたプログラムに、小学生の頃に児童館を利用していた中学生が、ボランティア参加していたのが印象的でした。

災害時には、様々な人たちの助け合い、協力で乗り越えていく必要があります。八本松児童館は、地域から協力してもらえるだけの存在ではなく、地域のために協力できることを考えていることが確認できました。

このような関係は、児童館が「人が集まる、協力しあう開かれた場」であることを意識して、日々運営しているからこそできたと言えるのではないのでしょうか。

富川万美(NPO法人ママプラグ理事)

保護者の感想

- 避難所での子どもの過ごし方について難しさを痛感しました。周りに知らない方がたくさんいるなかで、子どもにおとなしく!と言ってもなかなか聞いてくれないだろうし、もしそういう状況になったら大変だろうなという事が今回のプログラムで想像する事ができ、貴重な体験になりました。
- 自分達は大丈夫だろうと思っている人は多いと思いますし、私もその1人です。子どもがうるさく、落ち着きも無いので、正直災害があっても避難所を利用する事は出来ないだろうと思いました。周りに気を使って自分が疲れてしまうからです。それに犬もいるので避難所は難しいと感じました。ただ、被害にあった方々のお手伝いをする事は可能だとも思いました。
- 体験型で何をするにもワクワクして取り組む子どもたちを見ただけでも大満足でした。帰る途中で息子が「今日は楽しかったけど地震きたらああいうところで寝るの、嫌だなあ」と子どもなりに災害を考えるきっかけになったんだなあと思いました。いざという時に心強いサポーターがいてくれる安心感と、積極的にこういう取り組みをしていただいている児童館がある環境で子育てできる事に感謝です。

職員の感想

- 災害時に子どもの遊び、癒やし、学びのための場として機能できたらよい。大人が前を向けるように子どもが元気になってもらうのが児童館の役割なのではないか。
- これからも東日本大震災の経験・教訓などを子どもたちにバトンをつなぐ機会をつくっていきたい。
- 地域にはいろいろな資源があるので、こういったプログラムを通じて、災害時のことを意識して地域を知る機会をつくるのが大事だと思う。プログラムを実施するにあたっては地域のニーズにあわせることも意識する必要がある。
- 日常的に地域の様々な関係機関、団体と相互協力できるフラットな関係性をつくり、フレンドリーな児童館でありたい。

児童館の紹介

はちほんまつ

仙台市八本松児童館

運営主体：特定非営利活動法人みやぎ・せんたい子どもの丘

職員数：11名

所在地：宮城県仙台市太白区八本松2-4-20

利用者数：親子10組程度

児童館種別：小型児童館

(1日あたり)

プログラム：<http://hachihonmatsu.jugem.jp/>

Instagram：<https://www.instagram.com/hatihonmatujidoukan/?hl=ja>

Facebook：<https://ja-jp.facebook.com/hatihonmatujidoukan/>

防災プログラムと 災害対応を考えるワークショップ

こんな事業

1995年(平成7年)に発生した阪神・淡路大震災の経験から、神戸市の児童館では防災・減災のための取組が継続的に行われています。

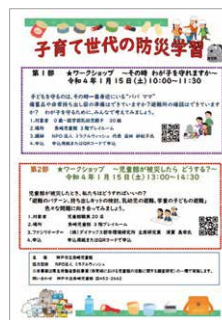
魚崎児童館では、これまで地域住民等と連携した取組をおこなってきましたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、最小人数で実施することとしました。実施したプログラムは、乳幼児世帯向けのワークショップと、災害の種類にあわせた児童館の対応を考える職員を対象にしたワークショップを行いました。

第1部では、乳幼児世帯を対象に、備蓄品や非常持ち出し袋を考えるワークショップを実施し、23組の親子が参加しました。



広 報

児童館のホームページ(じどうかんだより)、チラシ配布



プログラムの
概要

【第1部】乳幼児親子向けワークショップ(90分)

～その時 わが子を守れますか～

乳幼児世帯を対象に、備蓄品や非常持ち出し袋を考え、親子で防災リュックづくりをする。実施を通じて、子育て世帯同士の交流の機会とする。

・講師：子育てママのNPO(ミラクルウィッシュ)

備 品

職員が企画し、施設にあるものを使用

非常持ち出し袋に入れられるグッズは、100円ショップから調達

プログラムの概要

【第2部】災害時の児童館の役割を考えるワークショップ

～児童館が被災したら どうする?～

○プログラム概要

- (1)ワークショップのねらい(15分)
- (2)想定される児童館の被害確認(30分)
- (3)災害時の児童館の取組検討(30分)
- (4)全体でのふりかえり(15分)

※魚崎児童館のほか、神戸市東灘区内2つの児童館職員が参加

実施結果

※第2部の結果についてまとめました。

(1) 想定される児童館の被害確認

神戸市が公表しているハザードマップを参考に児童館ごとの想定される被害を紹介

相談者	想定される被害
魚崎児童館	・風水害・土砂災害：特になし ・地震・津波：震度6弱のゆれ、津波被害はないが、近隣海岸部は浸水
田中児童館	・風水害・土砂災害：特になし ・地震・津波：震度6弱のゆれ、近隣の津波の心配もない
洞森台児童館	・風水害・土砂災害：内水氾濫による浸水想定区域 ・地震・津波：震度6弱のゆれ、津波0.3-1.0m
本庄学童 保育コーナー	・風水害・土砂災害：土砂災害警戒区域 ・地震・津波：震度5強のゆれ、近隣の津波の心配もない

(2) 災害時の児童館の取組検討

災害時に、子どもの遊びや居場所を取り戻すために、2つのパターンからそれぞれ児童館の役割を検討しました。(下記は検討した項目)

ケースA :児童館が被災し、子どもたちの自宅も被災した場合

→児童館ではないところで、子どもたちに提供できることを考える

- 例
- ①「遊び」「居場所」を提供するために持ち出すもの(乳幼児、未就学児、小学生(学童クラブ)等のそれぞれのためにあるとよいもの)
 - ②児童館の運営再開のために持ち出すもの(子どもたちへの連絡、児童館活動のために必要なもの)
 - ③被災した児童館の代わりに使える場所

ケースB :児童館は無事でも、子どもたちの自宅は被災した場合

→児童館や地域の施設を使って、子どもたちに提供できることを考える

- 例
- ①「遊び」「居場所」を提供するために持ち出すもの(乳幼児、未就学児、小学生(学童クラブ)等のそれぞれのためにあるとよいもの)
 - ②被災した子どもたちのために、児童館以外で活動できる場所

検討結果

- ボール、なわとび、レジャーシート、カードゲーム、お絵かきぬりえ、ダンス用の小型スピーカーなど遊びの備蓄袋をつくる(これまで廃棄する予定のものを保管)。
- 活字が読みたくなる子ども向けに本も少しだけ準備する。
- グループわけなどに使えるように養生テープもあるとよい。
- 子どもの引き渡しのためのカードや災害時に貼り出すための用紙と筆記用具などが必要。
- 児童館は被災者を受け入れる可能性もあるので、近隣の公園や施設など遊べるスペースも考えておく。落ち着いたら、紙芝居やお絵かき、折り紙などができるとよい。

ワークショップ実施後、魚崎児童館の職員が話し合っ、「おもちゃ持ち出し袋」を準備しました。内容などは下記のとおりです。

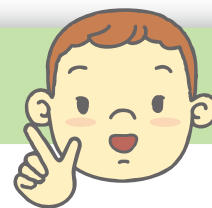
【おもちゃ持ち出し袋の内容一覧】

内容	数量
ぬりえ	3
トランプ	4
UNO	1
けん玉	2
お手玉	4
パズル	2
立体パズル	1

内容	数量
折紙	数セット
折紙の本	1
縄跳び	2
お絵かき用紙	何枚か
筆記用具 (鉛筆・消しゴム・ハサミ)	一式
色鉛筆	3
ミニ将棋	1



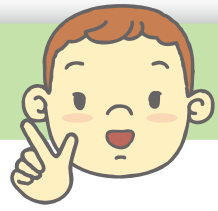
ポイント解説



災害を具体的にイメージ

- ワークショップでは、神戸市が公表している風水害・地震・津波ハザードマップをもとに、それぞれ参加した児童館で想定される被害(リスク)を確認した。土砂災害の被害、津波親水の被害が想定される児童館や、被害はないものの、近隣の被災者などが避難することが想定される児童館もあった。具体的な被害のイメージから、災害時の児童館がこういった対応をすべきなのか具体的に考える機会になった。
- また、ワークショップを通じて、児童館での子どもの受け入れ、もしくは被災した子どもたち向けに出張児童館などができるように持ち出しキットを検討することになった。

ポイント解説



日常から職員の意識啓発

- 魚崎児童館は、道路挟んで向かいに小学校があり、災害時には避難所になることが想定されている。そのため、児童館と地域住民等が連携した取組を展開している。
- 館長は、児童館が開館している時間帯に災害が発生した場合にどういった対応をすべきなのか、職員に対して問いかけをしている。この問いかけによって、利用している子どもの安全の確保、保護者との受け渡しなど具体的な対応を職員が考えることにつながっている。

調査研究委員からのコメント

非常時であっても継承していく震災の経験

例年であれば、小中学校や地域と連携した防災プログラムを実施している魚崎児童館、コロナ禍という非常時に防災プログラムを実施する、という二重の意味での「非常時」プログラムとなった。地元兵庫のNPOを活用したり、プログラムをパッケージ化して市内の他児童館でも実施するなどの工夫が随所に見られた。いつもの行っていたプログラムができなくても「少しでも震災の経験を次世代に継承していくんだ!」という児童館スタッフの強い意志を感じた。

第2部の児童館職員を対象としたワークショップ「災害時の児童館の活動を考える」は、各地どこの児童館でも実践できる内容で、第1部と同じくぜひパッケージ化して各地の児童館で実践いただきたい内容でした。児童館職員の災害対応力の向上に必ずプラスとなることと思います。ぜひ実践を!

大角玲子(神戸市総合児童センター(こべっこランド) 運営課長)

児童館の紹介

うおざき 魚崎児童館

運営主体：社会福祉法人神戸市社会福祉協議会

職員数：21名

所在地：兵庫県神戸市東灘区魚崎中町4-3-16

利用者数：150名(1日あたり)

児童館種別：小型児童館

ホームページ：<http://www.eonet.ne.jp/~uozaki-jidokan/>

とり+かえっこ in のむら 2021

こんな事業

2018年の平成30年7月豪雨で被災した際、地域の子どもたちを支援するプログラムとして「とり+かえっこ」*を始めました。職員は被災した子を把握していたため、その子たちがおもちゃを持ち帰れるように配慮しました。

去年は感染症が拡大する中で実施できなかつたため、2年の間にたくさんのおもちゃが集まり、今回過去最多のおもちゃを用意することができました。スタッフとなってお仕事をするのも子どもたちに人気があります。

被災後すぐに実施した前回は、100人近くの参加がありましたが、今年はコロナの影響もあり小学生11人、幼児11人、保護者9人の合計31人の参加でした。



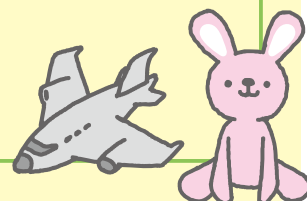
※「とり+かえっこ」とは？

使わなくなったおもちゃの交換を中心にした「子どものまち」です。おもちゃのリユースをきっかけとして、子ども同士のコミュニケーションを図り主体的な活動を促します。また、子どもたちが考えた“お店”を出したり、実行委員会を結成して運営に積極的に参画したりすることで、子どもたち自身で遊びを創造する体験もできます。

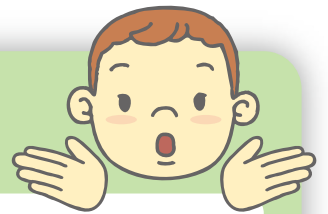
これは、全国でおこなわれている「かえっこ」の児童館版として国立総合児童センターこどもの城が開発したものです。

（あそび方）

- ① 家から使わなくなったおもちゃを持ってくる。
- ② かえっこバンクで持ってきたおもちゃを子どもに査定してもらい、カエルポイントに変える。
- ③ ポイントを使ってお買い物をする。スタッフになってお仕事をしたり、ゲームに参加したりしてポイントをためる。
- ④ ポイントを使ってオークションに参加する。



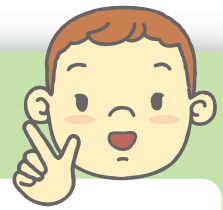
どうやって?



<p>広 報</p>	<p>ホームページに「じどうかんだより(イベントスケジュール)」を掲載、チラシ掲示</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>		
<p>プログラムの内容</p>	<p>事前準備</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>10:00 小学生スタッフ集合、 イベント準備開始</p> <p>11:50 イベント準備終了</p> </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>13:00 「とりにかえっこ」イベント開始</p> <p>15:00 オークション</p> <p>15:30 イベント終了</p> </td> </tr> </table>	<p>10:00 小学生スタッフ集合、 イベント準備開始</p> <p>11:50 イベント準備終了</p>	<p>13:00 「とりにかえっこ」イベント開始</p> <p>15:00 オークション</p> <p>15:30 イベント終了</p>
<p>10:00 小学生スタッフ集合、 イベント準備開始</p> <p>11:50 イベント準備終了</p>	<p>13:00 「とりにかえっこ」イベント開始</p> <p>15:00 オークション</p> <p>15:30 イベント終了</p>		
<p>協力体制</p>	<p>えひめこどもの城、地域住民よりおもちゃの寄贈</p>		
<p>準備物</p>	<p>机、おもちゃを入れるかごなど、施設にあるものを使用</p>		
<p>スタッフ</p>	<p>児童館職員:3名/子どもスタッフ:何名でも可※規模により異なる</p>		

野村児童館の被災状況

- 平成30年7月7日に被災し、臨時休館していた。
- 児童館職員も遠方に在住しており、当時野村地区までの道路が土砂崩れで寸断され、遠回りをして、児童館に駆け付けた。
- 児童館内は停電3日間、1週間断水により、児童館の再開は難しく、臨時休館。
- 7月21日より野村幼稚園のホールを間借りして児童館活動を再開。
- 12月末、元の場所にて児童館を開館。



ポイント解説

平成30年7月豪雨時、えひめこどもの城の対応

- 災害直後は、県内の児童館と情報共有のためのメーリングリストを活用して、状況把握を行った。
- 被災した地域の児童館には、電話をかけて、児童館職員の勤務状態、被災状況等を確認し、必要物品、消毒、片付け道具などを調達し持参した。
- 愛媛県と相談し、えひめこどもの城所有のバス(のちに人数が増えてバスをチャーター)を活用して、被災地の子どもたち(未就学児は親同伴、小学生・中学生)をこどもの城で受け入れる。
- 7月29日～8月末まで6回実施。当初2回程度を想定していたが、申し込み数が多かったため回数も増やした。
- 少し落ち着いたら、被災した児童館に相談しながら、おたのしみイベントなどを提供した。メーリングリストを活用し、他の児童館職員にも現地でのサポートを呼びかけた。

調査研究委員からのコメント

機動力のある大型児童館だからできること

えひめこどもの城(大型児童館)では、日頃から県内の児童館と連絡を密にしており、普段から連携を取りやすい関係性を築いており、それを活かしてすみやかに災害支援につなげることができました。

被災当初は日常を取り戻すお手伝いでしたが、少し落ち着いてくると子どもたちの遊びの支援が必要になりました。子どもたちが参画して作り上げ、運営する面白さや、持って帰って遊ぶおもちゃを手に入れた子どもの笑顔から、気持ちガリフレッシュできていたように感じました。窮屈な災害時の生活の中でホッとできる時間や場所になったのではないのでしょうか。

地域に根差す児童館では、被災した地域や子どもたちの置かれている状況を知り、さりげない支援が求められます。機動力のある大型児童館と、日頃からの地域とのつながり、子どもたちの関係がある小型児童館や児童センターが力を合わせると、より広がりのある支援が可能になります。

上木秀美(えひめこどもの城 事業企画チームリーダー、全国児童厚生員研究協議会 副会長)

児童館同士の相互支援の仕組みに期待

豪雨災害により、学校や幼稚園・保育園が浸水被害を受けると休みになります。自宅が被災する、あるいは自宅近所の公園等も被災すると、子どもの居場所や遊び場がなくなります。他方、被災した保護者は、被災した自宅の片付け作業や、被災に伴う事務手続きに追われ、作業や事務手続きの間の子どもの預け先のニーズが高まります。

児童館は、地域における子どもの大切な居場所ですが、児童館も被災すると、児童館の再開に向け職員は片付け等の作業に追われます。えひめこどもの城の取り組みは、被災した野村児童館を、大型児童館がサポートした事例であり、子どもの居場所づくりに貢献したことは、参加申込者数が多かった点からも伺えます。災害に備え、このような児童館同士の相互支援の仕組みを今後日本全国で構築していく必要があります。

阪本真由美(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授)

参加者・保護者の感想

(子ども)

- 今日はね、輪投げの担当するんよ。でも本当はあれ(おもちゃの査定:高学年担当)がやりたい。
- おもちゃはいらないけど、スタッフがやりたい。
- 普段は児童クラブに行くから児童館にはこない。今日はお友達がいるから来ました。

(保護者)

- 久しぶりの再会があって嬉しかったです。このイベントを待ちわびていました。
- 去年できなかった分、おもちゃは家にダンボール2箱用意していました。
- 小学生になり、ずっとやりたかったスタッフができて喜んでいました。幼いきょうだいがあるのでお兄ちゃんに目が届かず、この場は助かってます。

職員の感想

- 待ち望んで参加してくれた子が多かった。
- スタッフをした子も自分の意見が形になると嬉しそう。最後は「私がやったんだよ」と、達成感を語っていた。
- 元々えひめこどもの城でやっていたイベントであったためグッズも揃っており、すぐにできるイベントだった。
- 家が浸水してしまった子に、「これあるんやけど、使う?」と言って「とり+かえっこ」とは別におもちゃを用意して渡した。気に入って持って帰ってもらい、良かったと思う。
- 今後も継続したい。回数を重ねることで、「とり+かえっこ」を知っている子がだんだん増え、大きくなったらスタッフしようかなと言ってくれる子も増えると嬉しい。

児童館の紹介

のむら

野村児童館

運営主体：西予市	職員数：5名
所在地：愛媛県西予市野村町野村11-35-1	利用者数：20名(1日あたり)
児童館種別：小型児童館	
ホームページ： https://www.city.seiyo.ehime.jp/kakuka/nomura_sisho/seikatsu_fukushi/jidoukan/index.html	

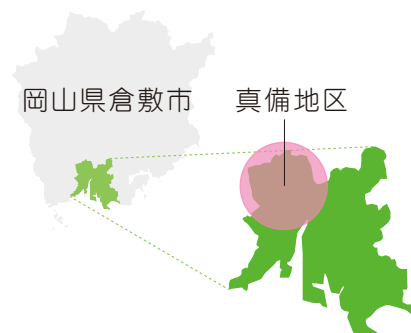
えひめこどもの城

運営主体：伊予鉄総合企画株式会社	職員数：約65名
所在地：愛媛県松山市西野町乙108番地1	利用者数：平均約658名 (1日あたり)
児童館種別：大型児童館	
ホームページ： https://www.i-kodomo.jp/	
Instagram： https://www.instagram.com/ehimekodomonoshiro/	
Facebook： https://www.facebook.com/1434747143255710/	

コラム

真備児童館「被災地での 子どもの居場所、遊び場づくり」

2018年(平成30年)6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に北海道や中部地方を含む全国的に広い範囲で発生した「平成30年7月豪雨」により、岡山県倉敷市真備地区は大きな被害を受けました。高梁川水系小田川では町内の堤防が決壊し、推定浸水深が最大で約5mに達するなど、学校、病院等が浸水、真備児童館も屋根まで水没してしまいました。



被災後の対応

いつ	何を	どうなった
2018年(平成30年) 7月7～8日	倉敷市の子育て支援課と協議	全市で対応するため、被災していない児童館も含め、全6の児童館・児童センターを7月末まで閉館
7月11日～16日	市要請により、全職員が被災地の支援に入る	<ul style="list-style-type: none"> ●4か所の避難所を手分けして巡回。ニーズのあった2つの避難所で、空き教室や避難所の隅を借りて、子どもの遊び場を開設 ●おもちゃ類、扇風機、自分の弁当等を持参
7月12～31日	二万幼稚園にて子どもの遊び場を実施	<ul style="list-style-type: none"> ●平日9～16時 ●延べ628人が利用
7月13～31日	他の2つの幼稚園で子どもの遊び場を実施	<ul style="list-style-type: none"> ●平日9～16時 ●岡田幼稚園で延べ483人、園幼稚園で延べ561人が利用
8月～31日	5館の児童館再開。週1日児童館を閉め、支援場所での子どもの遊び場を実施	保護者が自宅の片付けに行っている間、幼児を預かるといったニーズに変化
10月1日	仮拠点で真備児童館を再開	<ul style="list-style-type: none"> ●倉敷市真備支所内の会議室を借用 ●狭いため、乳幼児に配慮して小中学生が遊びにくかった(後日、別スペースに卓球台を設置)
2020(令和2)年 3月22日	真備児童館再開	元の場所で再開

被災した子どもたちの支援

（被災直後の対応）

- 被災後すぐに、全市で対応するため、倉敷市内の児童館は閉館して、被災した地域の避難所で子どもの遊びの支援をすることになりました。
- 子どもの遊び場のニーズが無い避難所もあり、平等に支援できないことが悩ましい状況でした。
- 避難所だけではなく、幼稚園も使うようになり、施設の職員が中心となってPRをしてくださったほか、市のホームページにも掲載してもらいました。
- おもちゃなどの備品は、職員が児童館から支援場所へ持ち寄りました。また幼稚園で支援を行った所では、幼稚園のおもちゃも借りて遊びを提供していました。

（8月以降の対応）

- 8月に入った頃から、幼児（3～5歳）が中心になりました。保護者が自宅の片付けに行っている間、幼児を預かって子どもたちの心が癒されるような遊びを職員が考えて支援しました。
- 日が経つにつれて、地域の方の支援が多くなると共に、夏休みに入ったことで、他地域の幼稚園や保育園の先生の支援が入るなど、段々と支援の手が増えていきました。
- ボランティアや幼稚園の保護者が、子どもたちの遊び場に協力してくださり、中高生は子どもたちと一緒に遊んでくれました。
- 使用した施設は、クーラーが無い所が多く、熱中症のことにも配慮して、扇風機を持ち寄って対応しました。
- 被災の有無に関わらず、できるだけどの子どもも同じように接するように、こちらから問い詰めることのないように、日々職員でも相談しながら対応しました。

（復旧に向けて）

- 10月1日から倉敷市真備支所内の会議室を仮拠点として児童館を再開しました。
- これまでの児童館に比べると狭く、小さい子がメインで遊ぶと、大きい子が遠慮して遊びにくい状況になりました。
- そこで、共有スペースを利用して卓球台を貸してもらえることになり、小・中学生が来て楽しむようになったほか、施設のテラスに人工芝を敷き、遊べるスペースが確保できたことで、子どもたちがより遊びやすくなりました。
- 被災前から、市内の児童館では「出前キッズ号」という出張児童館を実施していました。従来は職員の自家用車を使用していたが、被災後、倉敷市民からの寄付によって専用車両「お出かけ児童館号」が各児童館に1台ずつ配置され、2018年（平成30年）11月「おでかけ児童館」として再開しています。



職員からのメッセージ

- 初めて被災地に入った時は、安否確認をしている状況で、遊びの支援に行くには早すぎるのでは？との意見が大半だったため、私たちも不安がありました。結果的に、訪問したところには子どもたちが生活していて、児童館職員として関わることができてよかったと思っています。
- 日頃から倉敷市の全6児童館で情報交換や応援の体制があり、小学校や中学校とも繋がりがあったので早い時期から連携することができました。自治体や地域の関係者、団体から災害時も支援していただくことができたと思います。
- 普段から未来を見据えた児童館の役割を発信して、地域とのつながりやネットワークを作っておくことが私たちの務めであると思っています。困難にもみんなの手を借りて対応することができます。
- 今回は、幼稚園などでの活動ができましたが、あらためて被災時にこういったところで子どもたちの遊び場・居場所を提供できるのかは、考えておく必要があるのではないのでしょうか。

調査研究委員からのコメント

災害時に重要となる遊びの支援ができる児童厚生員の専門性

倉敷市真備地区では、西日本豪雨災害直後から市内児童館職員によって遊びの支援が展開されました。災害前からあったネットワークが活かされたのです。児童厚生員のみなさんは、命が優先のときに遊びの支援に行くことに葛藤があったそうです。しかし、「児童館の先生がいてくれたから安心して子どもを預けることができました」「たくさん遊んで、楽しかった!という子どもの笑顔があったからこそ生き延びることができました」という保護者の声からは、災害直後からの遊び支援の重要性をひしひしと感じます。災害派遣福祉チーム(DWAT)において子ども支援の専門職として想定されているのは保育士です。しかし、真備児童館のヒアリングからは、0-18才までをトータルに遊びで支えることのできる児童厚生員の専門性が極めて重要であることが明らかとなりました。

安部芳絵(工学院大学 基礎・教養部門 准教授、
厚生労働省社会保障審議会児童部会 放課後児童対策に関する専門委員会
遊びのプログラム等に関する専門委員会 専門委員)

参考：一般財団法人 児童健全育成推進財団

「平成30年西日本豪雨災害 被災地における児童館職員による遊び場づくり検証報告書」

<https://www.jidoukan.or.jp/info/news/84695a8bb925>

児童館の紹介

まび 真備児童館

運営主体：社会福祉法人 倉敷市総合福祉事業団

職員数：5名

所在地：岡山県倉敷市真備町有井1556-2

利用者数：110名(1日あたり)

児童館種別：小型児童館

ホームページ：<https://kgwc.or.jp/mabiji/>

ブログ：<https://kgwc.or.jp/mabiji/category/blog>

Instagram：<https://www.instagram.com/mabijidoukan/>

緊急下の子どもたちのためのケア 「子どもたちのための心理的応急処置」

(Psychological First Aid for Children:子どもたちのためのPFA)

地震や事故などの危機的な出来事に直面した子どもたちは、普段とは異なる反応や行動を示すことがあります。

「子どもたちのための心理的応急処置(子どもたちのためのPFA)」は、そのような子どもたちのことを傷つけずに対応するための方法です。

*子どもたちのためのPFAは、世界保健機関(WHO)などが支援者が共通して身につけておくべき心構えと対応をまとめたPFAを、子どもとその保護者・養育者に対して実施するうえで、子どもの発達段階の特性や、年齢にあった必要など、子どもに特化して、セーブ・ザ・チルドレンが作成したものです。

自然災害など危機的な出来事に直面した子どもたちが、不安を抱えたり、いつもと違った反応を示すことは自然なことです。緊急下では、泣き叫ぶ子どももいる一方、感情を全く示さなくなる子どももいます。反応は子どもによってさまざまですが、共通して言えるのは安定した大人がそばにいたことが大切だということ。子どもたちが少しずつ、自分たちのペースで落ち着きを戻せるよう、「子どもたちのための心理的応急処置 (Psychological First Aid for Children:子どもたちのためのPFA)の方法でサポートしてください。

準備 Preparation  「見る・聴く・つなぐ」を効果的に行い、自分の安全を守るための準備

見る Look



- 安全確認を行う**
 - 自分の身の安全を確認する。
 - 周囲の危険に注意する。
- 明らかに緊急の対応を必要としている子どもがいいるか探す**
 - 重傷を負い、緊急医療を必要としている子どもやその家族はいないか?
 - 水や食べ物、衣類の替え、避難場所などを必要としている子どもはいないか?
 - 虐待や暴力などの危険にさらされていると思われる子どもはいないか?
- 深刻なストレスを抱えている子どもがいいるか確認する**
 - 特別な支援を必要とする子どもはいないか?
 - 普段と様子が違う子どもはいないか?

聴く Listen



- 支援が必要と思われる子どもに寄り添う**
 - 優しく穏やかに話しかけ、自己紹介する。
 - 視線が子どもと同じ高さになるように身をかがめたり、しゃがむ。
 - 子どもが話したいときに話せるような安心・安全な環境をつくる。
- 子どものニーズや気がかりなことについて尋ねる**
 - 何が必要で、何が心配かを確認する。
 - できることを一緒に考えるなど手助けをし、子どもが自ら問題に対処できるように支える。
- 子どもの話に耳を傾け、気持ちを落ち着かせる手助けをする**
 - 子どもやその家族に寄り添う。
 - 話すことを無理強いしない。
 - 起きた出来事について子どもやその家族が話したい場合は、耳を傾ける。

つなぐ Link



- 基本的なニーズが満たされ、適切な支援が受けられるようサポートする
 - 安全の確保、衣・食・住・基本的な医療など、生きていく上で必要な基本的なニーズが満たされるよう情報を提供したり、つなぐ。
 - 特に必要としているもの(例えば、アレルギー対応の離乳食など)を把握し、それが入手できる場所へつなげる。
- 子どもを、大切な人や社会からの支援につなぐ
 - 子どもが家族や大切な人と離ればなれにならないよう支援する。
 - 例えば、遊びや学びなど、子どもが必要としている特有のニーズを理解し、支援につなげる。
- 情報を提供する
 - 子どもやその家族が必要とする情報を提供する。
 - 【危機に見舞われた人が求める主な情報】
 - 基本的ニーズに関すること・発生した出来事
 - 影響を受けた大切な人たちの状況・自分たちの安全
 - 自分たちの権利、必要な援助や物資を得る方法
- 自分で問題が対処できるよう手助けをする
 - 危機的状況下での子どものニーズは多様である。
 - 何でもしてあげるのではなく、できるだけ子どもの自助力を促す。

専門的な支援を必要とする子ども

生きていく上で必要な基本的なニーズが満たされ、安全、尊厳、権利が守られ、家族や地域からの支援を受けることで、多くの子どもは専門的な支援を必要とせず、再びもとの状態に自分の力で戻れるようになります。

しかし、子どもの中には、長期にわたって強いストレスを抱えていたり、日常生活に支障をきたすなど、自分だけでは対処できず、さらなる支援を必要とする子どももいます。

その際には、精神保健医療の専門機関や専門家につなげる必要があります。すぐに専門家につなげるのが難しい場合は、保健師、養護教諭、教員など、地域の人たちからさらなるサポートが受けられるようつなぐことが大切です。

自然災害などの影響を受けた 子どものころを支える5つのポイント

幼児期・学童期

- ① 可能な限り、これまで行ってきた日課を続け、規則正しいリズムを作りましょう。例えば、毎日決まった時間に起きて、食事をとる。遊ぶ時間を決めるなど。
- ② 気分をリフレッシュするために、運動や体を動かすアクティビティを行いましょう。例えば、子どもと一緒にストレッチやラジオ体操を試みるなど。
- ③ 子どもの中には、いつもよりも頻繁に抱っこを求めるなどスキンシップを必要とする子もいるかもしれません。そういう時は、子どもと一緒に手遊び歌をするなど、普段より意識することで子どもの安心につながります。
- ④ 自分のことは自分でできるということを感じてもらいましょう。例えば、2種類のおもちゃのうち、好きな方を子どもが自分で選ぶなど。どんなに小さなことでも、子ども自身が選ぶことで、子どもが物事や自分自身をコントロールしているという感覚を取り戻し、自己効力感を高めることにつながります。
- ⑤ つらい記憶を呼び起こすような物事から子どもを守ってください。気付かないうちに子どもがつらい出来事や不安、恐怖心を増幅するような映像に長くさらされている恐れがあります。意識的にテレビなどとの接触時間を減らしましょう。

学童期・思春期

- ① 可能な限り、これまで行ってきた日課を続け、規則正しいリズムを作りましょう。例えば、毎日決まった時間に起きて、食事をとる。学習や遊ぶ時間を決めるなど。
- ② 大人の役割を引き受けたり、普段より頑張りすぎている子どもはいませんか。子どもは年齢が高くなるにつれ、緊急時の深刻さを自身の視点からだけでなく、他者の視点からも理解できるようになり、強い責任感や罪悪感を抱くこともあります。十分な休息の時間をとれるよう、周りの大人が配慮をしてください。
- ③ この年代の子どもの特別なニーズを理解し、子どもたちが安心して過ごすことができる環境をつくりましょう。この年代の子どもは、心身ともに急激に成長するという難しい過程の渦中にいます。例えば、避難所における更衣室スペースの確保、生理用品や下着などの配布場所の配慮、自習スペースの確保や勉強支援などは、この年代の子どもの安心へつながります。
- ④ 子どもが自然に話し出したら、話に耳を傾けてください。子どもの話を遮ったり、自らの考えで子どもの話を判断したりせず、子どもの話に集中し、共感を言葉と態度で示し、落ち着けるよう手助けをしながら話を聴いてください。
- ⑤ 子どもたちの自立を支援しましょう。子どもができることは自分でやるよう促したり、どんな小さなことでも選択肢を提示することは、子どもが物事や自分自身をコントロールしているという感覚を取り戻し、自己効力感を高めることにつながります。

最後に、親や養育者など子どもの周りにいる大人は子どもにとって最も大切な人です。皆さんが普段通り子どものケアができるよう、食事や休息の時間をとり、周囲からのさまざまなサポートを活用してください。

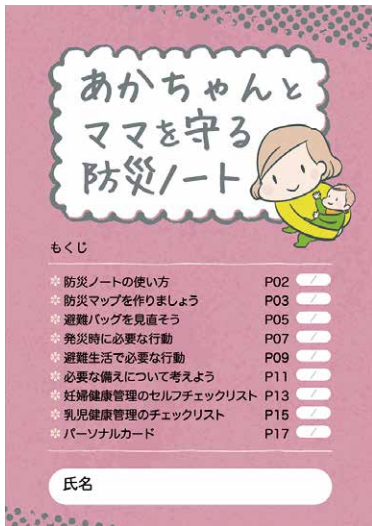


災害時の子育て ～平成30年7月豪雨実体験からのヒント～

発行：2021年3月

発行：災害と子育て研究会

編集：兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科・倉敷市立短期大学
岡山大学教育学部松多研究室、岐阜大学地震工学研究室防災
グループ、岡田地区まちづくり推進協議会、サンサポートオカヤマ



あかちゃんとママを守る防災ノート

発行：2016年

企画・協力：特定非営利活動法人MAMA-PLUG

監 修：春名めぐみ

(国立保健医療科学院生涯健康研究部/母子保健担当主
任研究官産婦人科医、医学博士、公衆衛生修士)

吉田 穂波

(国立保健医療科学院生涯健康研究部/母子保健担当主
任研究官産婦人科医、医学博士、公衆衛生修士)

企画・協力：特定非営利活動法人MAMA-PLUG

【事業概要】

「非常時における児童館の活動に関する調査研究」

業務受託者：株式会社 ダイナックス都市環境研究所

業務概要

- 調査研究委員会の設置・運営
- 非常時プログラムの企画・実施
- 非常時プログラムマニュアルの作成

非常時における児童館の活動に関する調査研究委員会（敬称略、五十音順）

安部 芳 絵（工学院大学 基礎・教養部門 准教授、厚生労働省 社会保障審議会児童部会
放課後児童対策に関する専門委員会、遊びのプログラム等に関する専門委員会
専門委員）

上木 秀 美（えひめこどもの城 事業企画チームリーダー、全国児童厚生員研究協議会 副会長）

大角 玲 子（神戸市総合児童センター（こべっこランド） 運営課長）

阪本真由美（兵庫県立大学 減災復興政策研究科 教授）

白田 好 彦（一般財団法人 児童健全育成推進財団 事業部主任）

富川 万 美（NPO法人 ママプラグ代表理事）



非常時における児童館 とりくみハンドブック

～感染症・自然災害時の対応を考える～

令和4年3月発行

発行：厚生労働省子ども家庭局子育て支援課

編集：株式会社ダイナックス都市環境研究所

デザイン・DTP：キシ タカユキ、イシノ キヨシ
